仙台市文化財調査報告書第39集

燕　沢　遺　跡

―発掘調査報告書―

1 9 8 2 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第39集

燕　沢　遺　跡

―発掘調査報告書―

1 9 8 2 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

燕沢遺跡は、縄文土器や古代の古瓦を散布する所として、古くから仙台市史や学界の報文によって周知されてきた遺跡であります。今回の本事業は、土地所有者日野氏による開発計画の申請が提出されたため、両者慎重な協議を行い、事前調査という記録保存の措置を講ずるに至った事業であります。

本調査は昭和56年４月～６月迄の３ヶ月を要しましたが、その結果古代の掘立柱建物跡、溝跡、土壙等の貴重な遺構を中心に古瓦や土器の検出をみるに至り、陸奥国分寺跡と多賀城を結ぶ線上にあるという地理的位置にあって、古代に於ける何んらかの国家的施設が存在する可能性をひめた重要な遺跡であることが報告されています。

もともと仙台市の北東部に展開する台ノ原・小田原丘陵は七北田川右岸で、その先端部が舌状の形状を成して沖積地へ張り出していますが、これらの丘陵上には陸奥国分寺や多賀城へ供給するための古代瓦窯跡群が存在し、また、その先端部には本遺跡をはじめ菖蒲沢遺跡、笹森城跡、小鶴城跡などもあって、附近一帯は、古代から中世にかけての歴史的風土を形づくっている地域であります。

この報告書は燕沢遺跡の調査成果をまとめたものであります。本遺跡の調査や整理、報告書刊行に当っては土地所有者日野氏をはじめ多くの方々の御協力を仰ぎながら完結することができたものであります。ここに心から感謝の意を表する次第であります。本書が文化財保護や学界の資料として多くの方々に御活用を願うものであります。

昭和57年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は、宅地造成工事に伴う燕沢遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書の作成に際して進藤秋輝・高野芳宏・白鳥良一（宮城県多賀城跡調査研究所）、平川南（東北歴史資料館）各氏の御助言をいただいた。

3．本書の文章・実測図中の方位は真北で統一してある。

4．本書に掲載した地図は国土地理院発行の５万分の１「仙台」を使用したものである。

5．本書中の土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を使用した。

6．本報告の執筆・編集は渡部弘美が担当し、一部遺物等の整理・実測に学生諸氏等の協力をいただいた。

7．本遺跡の出土遺物は仙台市教育委員会が一括保管している。

本　文　目　次

Ⅰ．調査に至る経過……1
Ⅱ．遺跡の位置と環境……1
　１．地理的環境……1
　２．歴史的環境……1
Ⅲ．燕沢遺跡について……3
Ⅳ．調査の方法と経過……7
Ⅴ．調査概要……7
　１．基本層位……7
　２．発見遺構と出土遺物……8
　３．出土遺物について……13
Ⅵ．考察……25
　１．出土遺物の年代……25
　２．遺構の性格と年代……26
　３．遺跡の性格……26
Ⅶ．まとめ……27

図・図版・表目次

図１　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
図２　遺跡周辺の地形……4
図３　遺構配置……5・6
図４　基本層位……7
図５　１号掘立柱建物跡……8
図６　２号掘立柱建物跡……9
図７　３号掘立柱建物跡……10
図８　１号土壙遺物出土状況……11
図９　２・３・５号土壙断面……11
図10　溝跡断面……12
図11　溝状遺構断面……13
図12　出土遺物Ⅰ（平瓦１～３類）……16
図13　出土遺物Ⅱ（平瓦４類）……17
図14　出土遺物Ⅲ（平瓦４類）……18
図15　出土遺物Ⅳ（平瓦４・５類）……19
図16　出土遺物Ⅴ（丸瓦１・２類）……20
図17　出土遺物Ⅵ（丸瓦２～４類）……21
図18　出土遺物Ⅶ（土師器・須恵器）……22
図19　出土遺物Ⅷ（須恵器・石製品）……23
図版１・２　遺跡周辺航空写真……31
図版３～５　遺構配置……32
図版６　１号掘立柱建物跡……33
図版７　２号掘立柱建物跡……33
図版８　３号掘立柱建物跡……33

図版９　３号掘立・柱穴断面…… 34
図版10　３号掘立・柱穴内瓦検出状況・34
図版11・12　１号土壙・遺物検出状況…34・35
図版13　１号溝…… 35
図版14　平瓦１～３・５類…… 36
図版15　平瓦４類…… 37
図版16　丸瓦１～４類…… 38
図版17　土器類・陶器類・石製類…… 39
表１　出土遺物集成…… 24
表２　掲載出土遺物観察表…… 40

調　査　要　項

遺跡名称　燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－101）

所 在 地　仙台市燕沢東三丁目12

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

担当職員　試掘調査　結城慎一・工藤哲司

　　本調査　　渡部弘美・長島栄一

調査期間　試掘調査　昭和55年６月９日

　　本調査　　昭和56年４月14日～昭和56年６月19日

調査対象面積　1100㎡（調査面積720㎡）

調査協力者　日野はつね

調査参加者　相沢林三郎・相沢勇・石森留吉・遠藤長吉・佐藤徳右エ門・高野襲蔵・永野正
　　武田勇之助・横田要七・真中信三・横手一彦・藤沢美智・前田芳枝・本橋憲子

整理参加者　浅野静子・原田ふみ子・佐々田弥生・松本寿一・芳賀英実・池田俊也・只野宗一
　　宮本昌俊・鈴木勝彦・大野亨・佐藤淳・大和田晶子・斎藤三重子・田村ゆかり

Ⅰ　調査に至る経過

燕沢遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ-101）は仙台市北部を東西に延びる台ノ原・小田原丘陵の東端に位置しており、古くより布目瓦や土器が出土する所として知られてきた。

遺跡の所在する当丘陵は近年急速に宅地化が進み大小の団地群もみられ、遺跡地内も宅地化が進みつつある。昭和55年、仙台市燕沢東三丁目12において宅地造成が計画され、地権者　日野はつね氏より開発行為事前協議書が提出された。開発申請地は遺跡の中央部にあたる場所でもあり、仙台市教育委員会は試掘調査を実施することにした。その結果、掘立柱跡や溝跡が確認され、再度の協議により開発部分の事前調査を行なうことにし、昭和56年４月14日より記録保存を目的とした調査を実施した。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１．地理的環境

燕沢遺跡は東北本線東仙台駅より北東約２㎞の地点、仙台市燕沢東三丁目・岩切字山崎西に所在する。

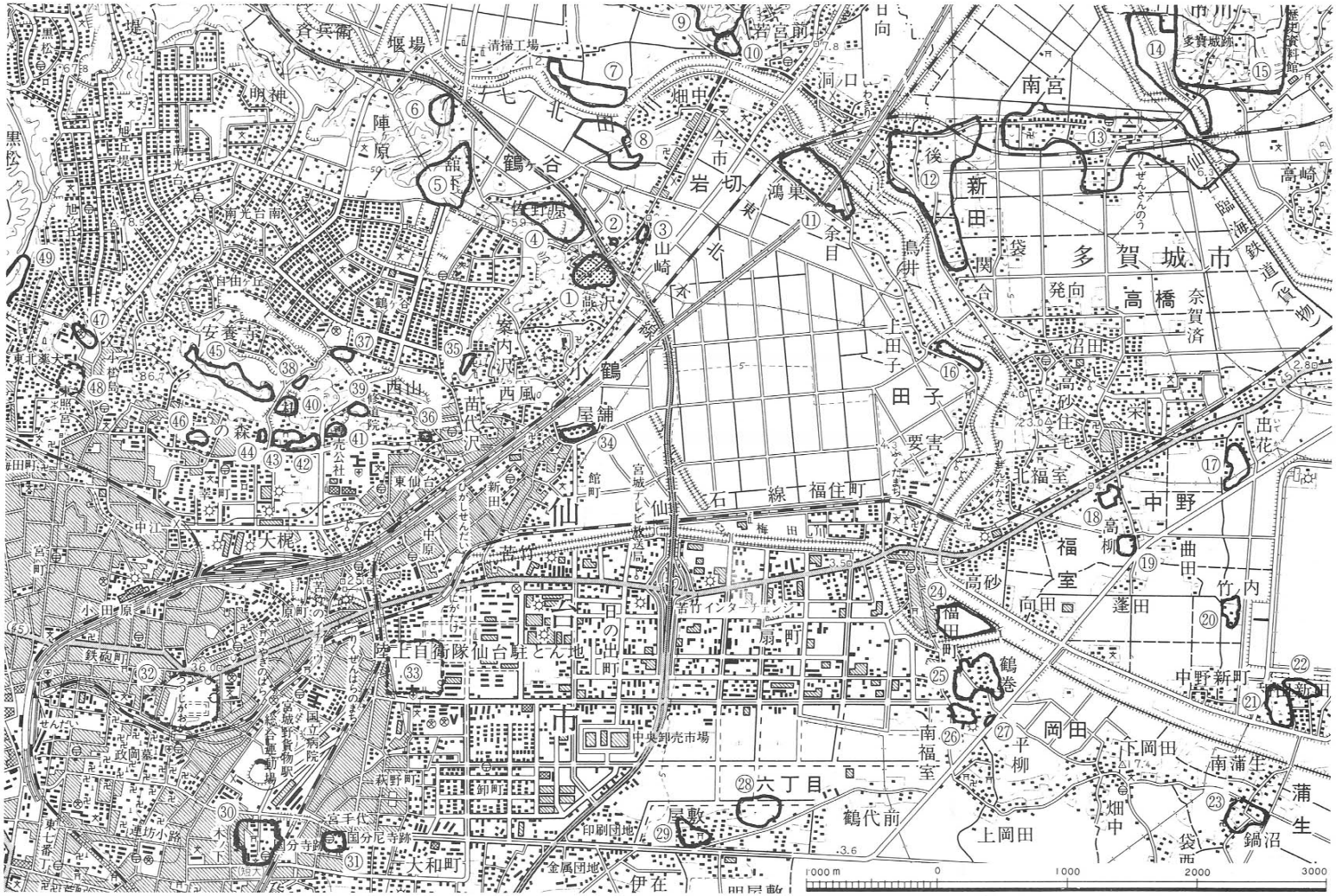
遺跡周辺の地形を概観すると、奥羽山地から東へ延びる富谷・七北田（仙台市東部においては台ノ原・小田原丘陵の呼称がある）丘陵が張り出しており、両丘陵を七北田川が東流しながら開析し、平野部において梅田川を合流し太平洋に注いでいる。当河川は両岸に河岸段丘を発達させ丘陵面に要害地形を形づくっている。又、丘陵端より太平洋に向けて広大な面積の沖積平野を形成せしめ、河川周辺には自然堤防の地形もみられる。

遺跡は台ノ原・小田原丘陵東端部、七北田川右岸の標高20～30ｍ程の段丘上に立地する。平野部との比高差は10～20ｍ程である。遺跡の範囲は東西250ｍ、南北200ｍ程の広がりが考えられ、立地は南側において急傾斜面の要害地形、北側では緩斜面となっており、北側と西側では小河川が開析した谷地形がみられ、あたかも独立丘陵の様相を呈する。このように立地としては平坦面が少なく緩斜面に遺跡の広がりをもつという特徴がみられる。

２．歴史的環境

燕沢遺跡周辺は良好な地理的環境から数多くの遺跡が分布している。特に両丘陵南側部と七北田川周辺に集中する。遺跡周辺では古墳時代以前の遺構が確認されておらず不明な点も多いが、それ以後の遺跡は種類・数とも多くみられる。

古墳時代の遺跡としては七北田川の自然堤防上に立地する鴻ノ巣遺跡・新田遺跡がある。古墳時代前・中期の遺物が出土しており、古墳時代でも早い時期から七北田川周辺は生活の場と


仙台市
多賀城市
南宮
新田
高橋
中野
福室
鶴巻
岡田
下岡田
南蒲生
蒲生
鍋沼
六丁目
鶴代前
上岡田
平柳
南福室
福田町
高砂
向田
蓬田
曲田
竹内
中野新町
新田
高柳
北福室
高砂住宅
沼田
発向
奈賀済
出花
石巻線
福住町
梅田
扇町
苦竹インター
中央卸売市場
印刷団地
金属団地
伊在
大和町
宮城野貨物駅
総合運動場
国立病院
陸上自衛隊仙台駐とん地
鉄砲町
小田原
中江
宮町
大梶
東仙台
新田
館町
仙台
苗代沢
西風
西山
案内沢
小鶴
屋舗
安養寺
森
鶴ヶ谷
陣原
堤
明神
黒松
南光台
旭丘
清掃工場
堰場
兵衛
北目
岩切
今市
畑中
若宮前
洞口
日向
鴻巣
余目
後
鳥併
上田子
田子
袋
関合
多賀城跡
歴史資料館
高崎
仙石線
JR東北本線
JR仙石線
JR常磐線
JR東北新幹

しての利用がみられたようである。両丘陵麓には善応寺・東光寺・入生沢等の横穴墓がみられる。又、台ノ原・小田原丘陵東部においては初期須恵器生産窯の大蓮寺窯跡がある。

奈良時代になると、陸奥国の国府である多賀城や陸奥国分寺・同尼寺が造営され、それらに供給される瓦・土器等の生産が台ノ原・小田原丘陵上で開始されている。現在確認されている窯跡の数は18群にものぼり、一大窯跡群が形成されていたことがうかがえる。

中世の遺跡では七北田川を南眼する要害の地に高森城（岩切城）がある。これは陸奥国府留守職に補任された伊沢（留守）家景が構えた館である。菩提寺である東光寺には磨崖仏や板碑が多数みられる。又、数多くの居館が周辺にみられ、中世における要衝の地であったことがうかがわれる。

このように燕沢遺跡周辺は古くは古墳時代から連綿と続く多くの遺跡で構成されている。

Ⅲ　燕沢遺跡について

燕沢遺跡は台地東側平坦部において縄文土器や石器も採集されており縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡として知られていたが、特に古瓦が散布することで注意されていた。

これらのことから遺跡についての論考もいくつかみられる。故石田茂作氏は「仏教の初期文化」において燕澤寺という名称で遺跡を取り上げており、国分寺建立の関連の中で奈良時代寺院跡としての性格を与えている。(註1) 燕澤寺自体の説明はなく詳細は不明である。伊東信雄氏は仙台市史等の中で「燕澤古瓦出土地」として取り上げている。出土した重弁蓮華文軒丸瓦や土師器からみて平安時代初期のものとし、遺跡の性格については不明としている。しかし、遺跡の立地する地理的・歴史的環境などから国家的施設の存在を示唆している。(註2) 又、故内藤政恒氏は「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦」の中で燕沢遺跡と小田原案内の瓦窯址を密接

1. 燕沢遺跡　C—101
2. 千人塚古墳　C—005
3. 山崎囲遺跡　C—292
4. 菖蒲沢遺跡　C—141
5. 笹森城跡　C—512
6. 北畑遺跡　C—237
7. 大正囲遺跡　C—220
8. 岩切畑中遺跡　C—221
9. 高森城跡　C—502
10. 東光寺横穴群　C—032
　東光寺城跡　C—508
　東光寺古碑・磨崖仏　C—602
11. 鴻ノ巣遺跡　C—135
12. 新田遺跡
13. 山王遺跡
14. 市川橋遺跡
15. 多賀城跡
16. 堰下遺跡　C—218
17. 出花遺跡　C—176
18. 高柳B遺跡　C—174
19. 高柳A遺跡　C—173
20. 竹ノ内遺跡　C—178
21. 和田織部館跡　C—523
22. 牛小舎遺跡　C—183
23. 田母神屋敷跡　C—524
24. 福田町遺跡　C—223
25. 鶴巻Ⅰ遺跡　C—224
26. 鶴巻Ⅱ遺跡　C—225
27. 小原遺跡　C—227
28. 明屋敷遺跡　C—234
29. 北屋敷遺跡　C—168
30. 陸奥国分寺跡　C—419
31. 陸奥国分尼寺跡　C—420
32. 国分鞭館跡　C—514
33. 南目城跡　C—510
34. 小鶴城跡　C—509
35. 善応寺横穴群　C—027
36. 大蓮寺窯跡　C—415
37. 安養寺中囲窯跡　C—410
38. 安養寺配水場窯跡　C—411
39. 安養寺下窯跡　C—412
40. 枡江遺跡　C—433
41. 土手前窯跡　C—414
42. 神明社窯跡　C—408
43. 神明社裏遺跡　C—172
44. 二ノ森窯跡　C—409
45. 与兵衛沼窯跡　C—407
46. 庚申前窯跡　C—406
47. 南光沢窯跡　C—405
48. 小田原長命坂窯跡　C—404
49. 五本松窯跡　C—403

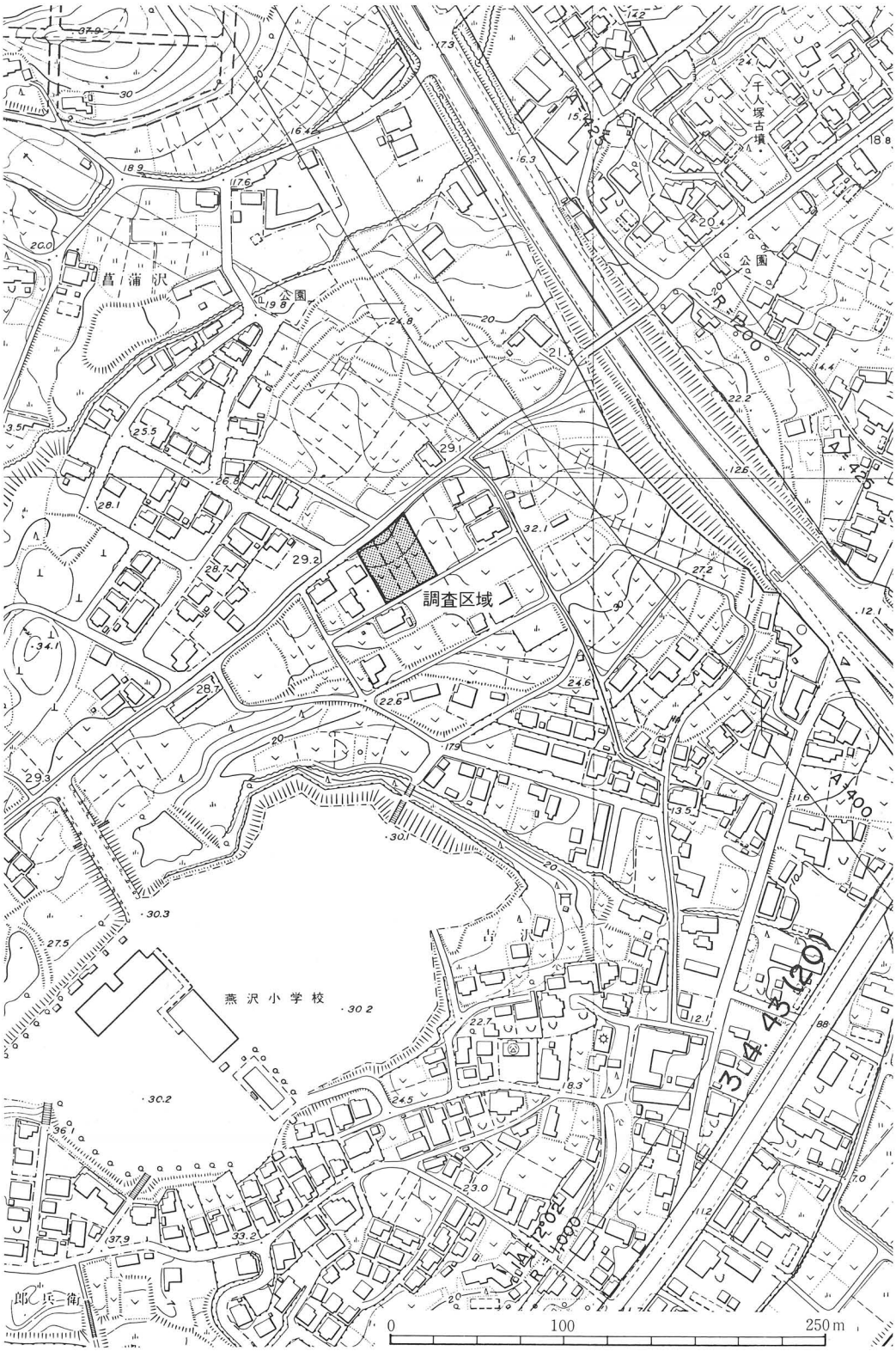


図２　遺跡周辺の地形

10号溝
11号溝
1号溝
3号溝
2号溝
2号土壙
1号土壙
3号土壙
溝状遺構
1号掘立柱建物
2号掘立柱建物
3号掘立柱建物
5号土壙
0
3
6 m

図3 遺 構 配 置

な関係をもつものとして取り上げており、窯跡群の性格と供給先との関連について言及している。その記述の中に古手の瓦についての説明があり、燕沢遺跡上限年代に関する大きな問題を提示されている。(註3)

このように燕沢遺跡は寺院か官衙としての性格が述べられ、年代に関する点についてもいくつかの論考がなされ、その後の踏査・研究において新資料もみられ今日に至っている。(註4)

Ⅳ　調査の方法と経過

今回、提出された開発予定地は遺跡の中央部西側にあたる、標高31～32ｍのゆるやかに北側へ傾斜をみる地点である。開発面積は約1,100㎡で、排土等を考慮した約720㎡の調査を行なった。

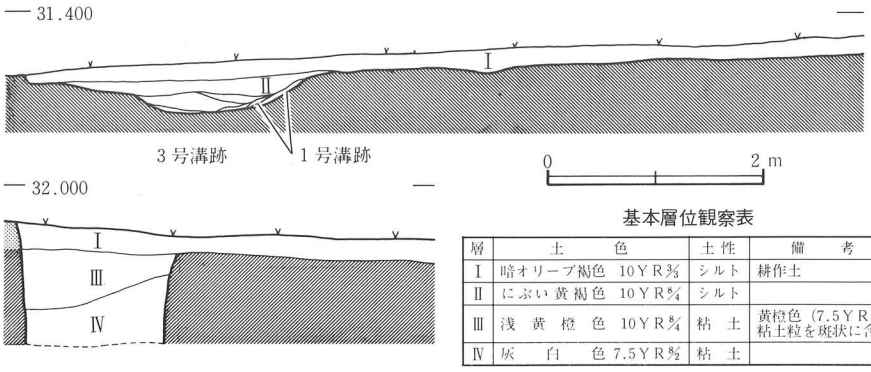
調査区設定は土地境界杭を基準とし、南北（真北線から西へ約32°偏する）に基準線を設け６ｍを単位としたグリッドを設定した。グリッド名は南北軸にアルファベット文字・東西軸に算用数字を用いた名称を使用した。

調査は表土層全面を重機で排除し、遺構確認を進めていった。表土層は地形的な条件もあり非常に薄く、トレンチ南側では10cm程の掘り下げで遺構確認面となっている。検出された遺構には掘立柱建物跡・土壙・溝跡・溝状遺構・ピット等がある。遺構の配置に関して、トレンチ北側に溝跡・ピットが集中し、南側に掘立柱建物跡が集中する特徴がみられた。実測方法は平板測量を基本とし、一部の遺構については簡易の遣り方測量を用いた。

調査も終了に近づいた６月６日には現地で説明会を開催し、調査は６月19日に終了した。

Ⅴ　調査概要

１．基本層位



基本層位観察表

層	土　色	土性	備　考
Ⅰ	暗オリーブ褐色　10YR3/3	シルト	耕作土
Ⅱ	にぶい黄褐色　10YR5/4	シルト	
Ⅲ	浅黄橙色　10YR8/4	粘土	黄橙色（7.5YR7/6）粘土粒を斑状に含む
Ⅳ	灰白色　7.5YR8/2	粘土	

図４　基本層位

調査区内の地山までの基本層位は三層に分けられる。第Ⅰ層：耕作土である。暗オリーブ褐色のシルト層で厚さ10～30cm程である。出土遺物には土師器・須恵器・瓦・陶磁器等がある。第Ⅱ層：にぶい黄褐色のシルト層である。厚さ10～15cm程で、調査区北側のみに分布している。出土遺物には土師器・須恵器・瓦等がある。第Ⅲ層：浅黄橙色の粘土層（地山）である。全ての遺構は第Ⅲ層面で確認された。

2．発見遺構と出土遺物

検出された古代の遺構は掘立柱建物跡３棟、掘立柱跡１基、土壙４基、溝跡５条、溝状遺構１基、大小のピット130余である。他に現代の溝跡・土壙が確認された。

(1)掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡　調査区外へ一部延びるため不明な点もあるが、桁行３間、梁行３間の方形棟の建物跡と考えられる。柱穴の配列から北側に廂をもつ建物とも考えうるが、柱列の規模

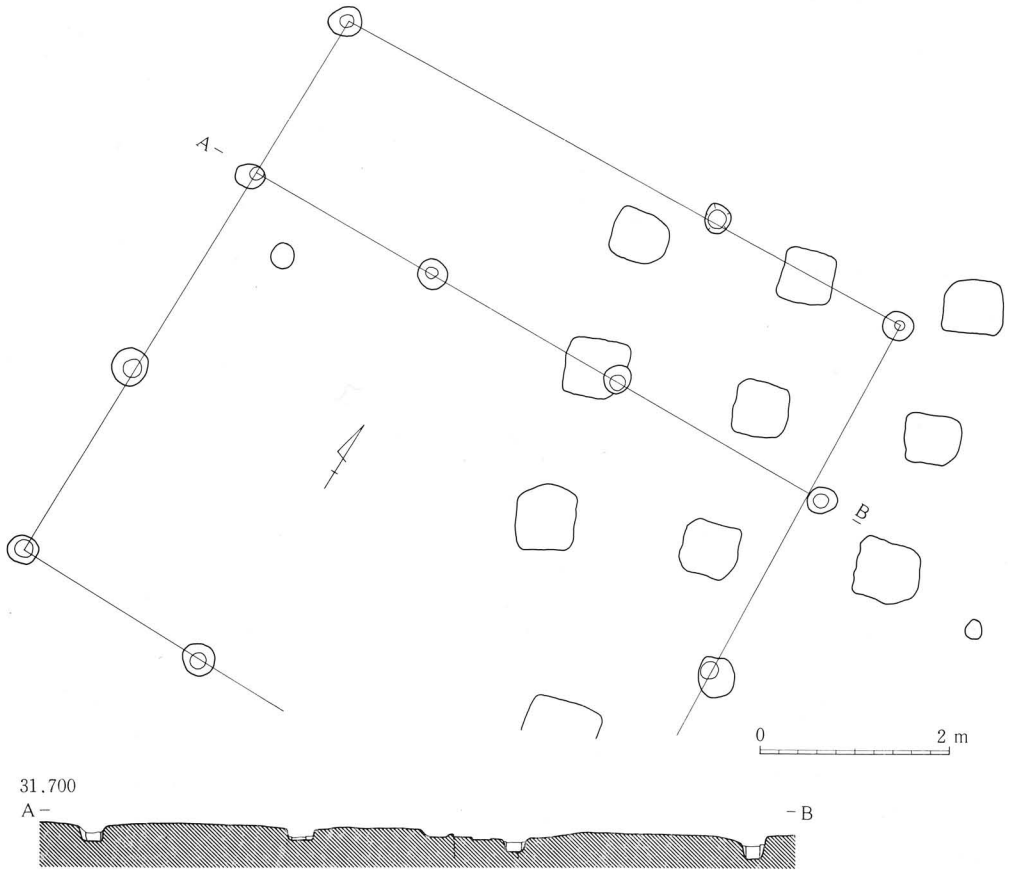


図５　１号掘立柱建物跡

等から判断しがたく不明である。建物の方向は西側柱列でN－0°－Eである。柱間寸法は梁行西側で北から189＋243＋225cmで総長657cm、桁行北側で西から 445(2間分)＋225cm で総長670cm、北側二列目で215＋228＋250cmで総長693cmを計る。柱穴掘り方は径30～40cmの楕円形である。柱痕跡は径10～20cmの円形で、深さは5～15cm程である。柱穴埋土は灰黄褐色のシルト質粘土である。2号掘立柱建物跡と重複関係にあり柱穴を切っている。

2号掘立柱建物跡　桁行2間、梁行2間の総柱の東西棟の建物跡である。梁行列を基準とすると桁行列は南側へ7°程ずれており、建物の平面形が菱形を呈している。建物の方向は梁西側でN－14°－Wである。桁行の柱間寸法は北側で西から184＋194cmで総長378cm、中央で187＋188cmで総長375cmを計る。梁行の柱間寸法は西側で北から150＋154cmで総長304cm、中央で153＋154cmで総長308cmを計る。柱穴掘り方は隅丸長方形を呈し、最大のもので70×65cm、最小のもので60×50cmを計りほぼ均一な規模をもつ。柱痕跡は径20cm前後で、遺存状況の良好なもので深さ40cmを計る。柱穴埋土には明黄褐色・黄橙色・灰黄褐色のシルト質粘土を混じり合わせたものを使用し、互層になっており堅くつきかためられている。

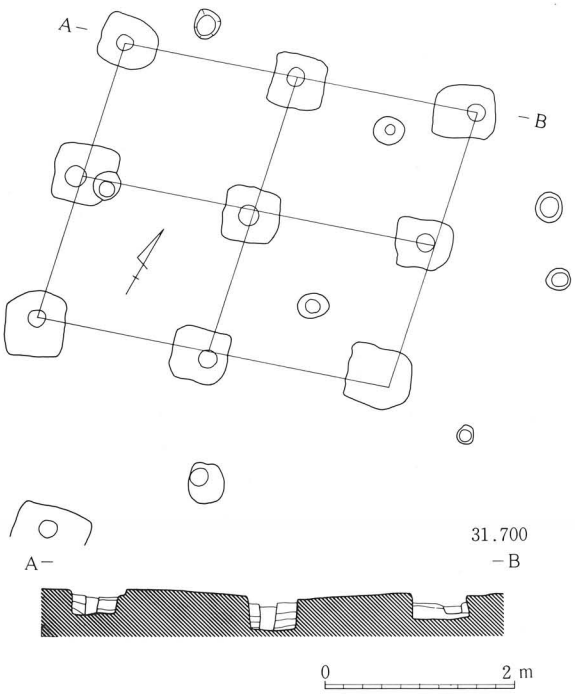


図6　2号掘立柱建物跡

3号掘立柱建物跡　南北列1間（柱間寸法270cm）・東西列1間（柱間寸法225cm）のみの確認であるため全容は不明である。建物の方向は東側列でN－2°－Wである。柱穴掘り方は隅丸長方形を呈し、最大のもので90×70cm、最小のもので65×55cmを計る。柱痕跡は径20cm前後で、遺存状況の良好なもので深さ40cmを計る。柱穴埋土には明黄褐色・黄橙色のシルト質粘土を混じり合わせたものを互層にし堅くしめている。東西列西側の柱穴では柱痕確認面において平瓦片が立った状態で1点出土している。又、柱痕跡直下の柱穴底面において平瓦が凹面を上に向け、敷かれた様な状態で検出されている。検出状況から礎板としての使用が考えられる。復元作業で三枚の完形品となっている。他に土師器甕が出土している。

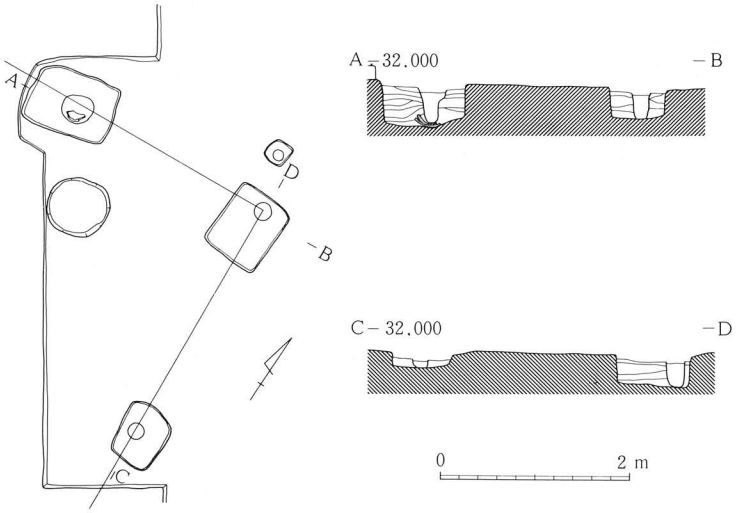


図７　３号掘立柱建物跡

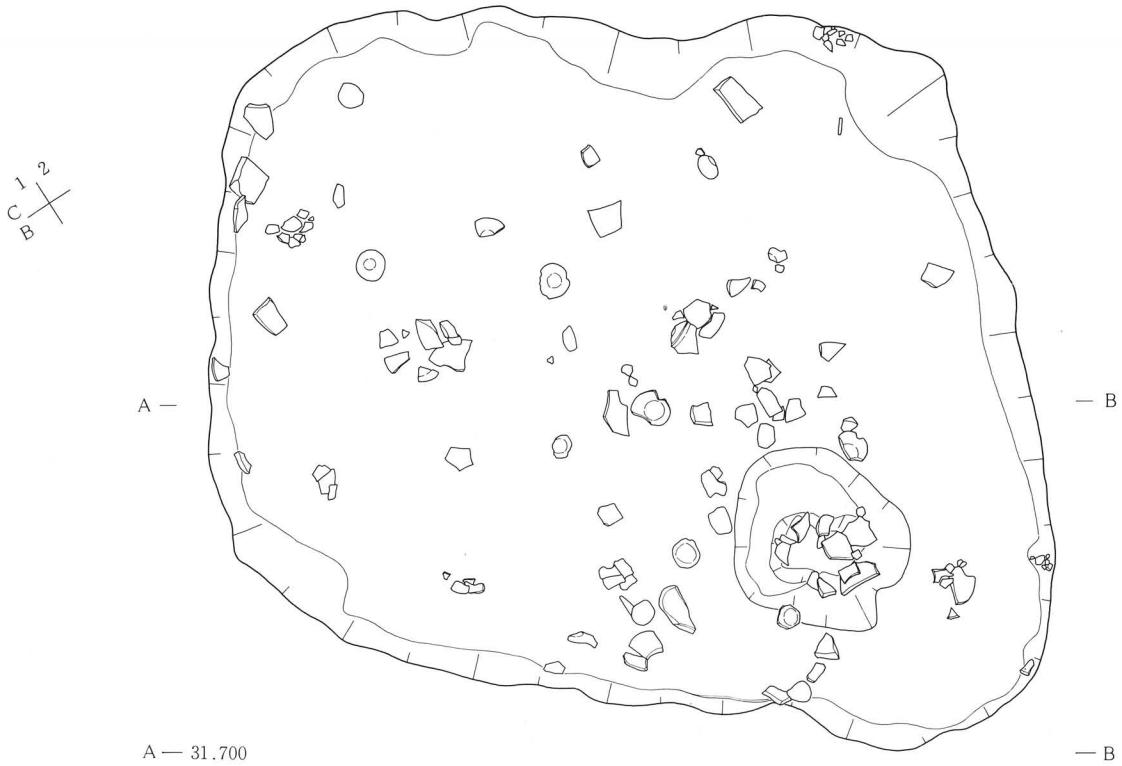
(2)土　　壙

１号土壙　調査区中央部西側のゆるやかに北側へ傾斜する地点で確認した。平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈する。大きさは東西軸で320cm、南北軸で260cmを計る。深さは確認面から20～30cm程である。壁は南側から西側にかけては急な立ち上がりをみるが、東側から北側ではゆるやかな立ち上がりとなっている。底面はほぼ平坦で、南西部隅には径80cm程の楕円形の浅い落ち込みがみられる。堆積土は５層に分けられ各層から遺物が出土している。種類として土師器坏・甕、土師質土器鉢、須恵器坏・甕・壺、平瓦・丸瓦、石製品がある。土師器坏体部に「宗」と墨書されたものが一点含まれている。多くの出土量にもかかわらず土器・瓦類はほとんどのものが破片資料であり、このような状況からも廃棄場所としての性格が考えられる。

２号土壙　調査区中央部で確認された。現代の溝に一部切られているが、平面形は円形を呈する。大きさは長軸で150cm、深さ40cmを計る。断面形はゆるやかな立ち上がりをもつ擂鉢形である。堆積土は６層観察され、レンズ状堆積をなしている。少量の須恵器坏・甕、平瓦・丸瓦が出土している。

３号土壙　調査区中央部、２号土壙東側に位置する。現代溝に西側部が切られているが、平面形は円形を呈する。大きさは東西軸で110cmを計り、深さは30cm程である。断面形は擂鉢状を呈する。堆積土は５層みられ、須恵器坏・壺、丸瓦が出土している。形態や遺物出土状況から２号土壙と同類のものと考えられる。

５号土壙　調査区南西部に位置する。平面形は円形で断面は舟底形を呈する。大きさは長軸で65cm、深さ20cmを計る。堆積土は４層みられ、土師器坏が出土している。

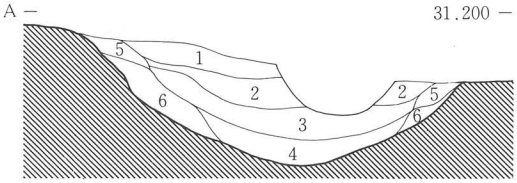


1号土壙堆積土観察表

層	土色	土性	備考
1	黄橙色10YR7/8	シルト	土器片を含む
2a	にぶい黄褐色10YR5/3	シルト	炭化物・土器片を含む
2b	にぶい黄褐色10YR5/3	シルト	炭化物を含む
3a	にぶい黄橙色10YR6/4	シルト	炭化物を含む
3b	にぶい黄褐色10YR5/4	シルト	
4	黄褐色10YR5/6	シルト	
5a	にぶい黄橙色10YR7/3	シルト	
5b	にぶい黄橙色10YR6/3	粘土質シルト	
5c	にぶい黄橙色10YR7/2	粘土質シルト	炭化物を多量に含む

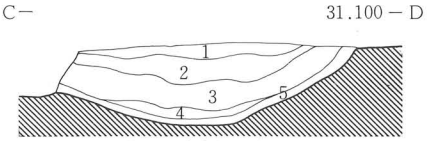
0 1 m

図8　1号土壙遺物出土状況



2号土壙堆積土観察表

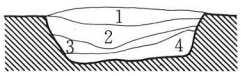
層	土色	土性	備考
1	にぶい黄橙色10YR6/3	シルト	
2	にぶい黄橙色10YR5/4	シルト	炭化物を含む
3	灰黄褐色10YR5/2	シルト	酸化鉄を斑に含む
4	暗褐色10YR3/3	粘土質シルト	
5	にぶい黄褐色10YR5/3	シルト	
6	灰黄褐色10YR5/2	砂	



3号土壙堆積土観察表

層	土色	土性	備考
1	黄褐色10YR5/6	シルト	
2	にぶい黄褐色10YR5/3	シルト	
3	にぶい黄褐色10YR5/4	シルト	
4	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	
5	褐灰色10YR5/1	シルト	

E —
31.900 — F



5号土壙堆積土観察表

層	土色	土性	備考
1	黄橙色10YR8/6	砂質粘土	土器片を含む
2	明黄褐色10YR6/6	砂質粘土	炭化物を含む
3	にぶい黄褐色10YR5/4	砂質粘土	
4	明黄褐色10YR7/6	砂質粘土	

0 1 m

図9　2・3・5号土壙断面

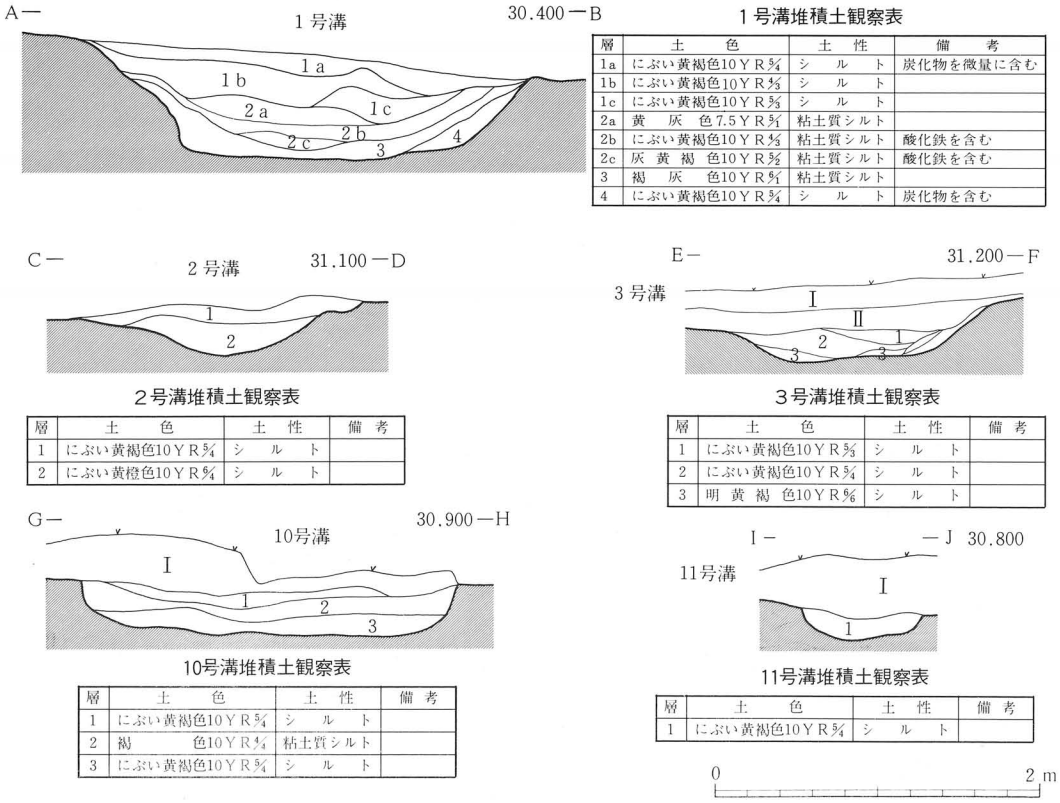
(3)溝　　跡

1号溝跡　調査区北側の緩斜面に位置し、やや北側に屈曲する東西方向に延びる溝である。上幅は最大で160cm・深さ30cmを計り、断面は逆台形を呈する。堆積土は大きく4層に分けられ、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、灰釉陶器埦・皿、平瓦・丸瓦が出土している。調査区東側で3号溝に切られている。

2号溝跡　調査区東側から中央部に向けて延びる溝である。上幅は最大で70cm、深さは15cmを計り、断面は立ち上がりのゆるい皿状を呈する。堆積土は2層観察される。1号溝跡南壁に接しているが削平のため新旧関係については不明である。溝の軸線が真北に対してほぼ直交しており建物跡との関連が留意される。

3号溝跡　調査区北側の角に位置するため一部分の確認にとどまっている。上幅は70cm程で深さは20cmを計る。断面は皿状を呈する。堆積土は3層観察され、土師器甕・須恵器甕が出土している。2号溝跡と同様に軸線が真北に対してほぼ直交している。2号溝跡との距離は850cm程である。

10号溝跡　調査区北側角に位置する。上幅は100cm程で深さは20cmを計る。断面は舟底形を



1号溝堆積土観察表

層	土　色	土　性	備　考
1a	にぶい黄褐色10YR5/4	シ　ル　ト	炭化物を微量に含む
1b	にぶい黄褐色10YR5/3	シ　ル　ト	
1c	にぶい黄褐色10YR5/3	シ　ル　ト	
2a	黄　灰　色7.5YR5/1	粘土質シルト	
2b	にぶい黄褐色10YR5/3	粘土質シルト	酸化鉄を含む
2c	灰　黄　褐　色10YR5/2	粘土質シルト	酸化鉄を含む
3	褐　灰　色10YR5/1	粘土質シルト	
4	にぶい黄褐色10YR5/4	シ　ル　ト	炭化物を含む

2号溝堆積土観察表

層	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色10YR5/4	シ　ル　ト	
2	にぶい黄橙色10YR5/4	シ　ル　ト	

3号溝堆積土観察表

層	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色10YR5/3	シ　ル　ト	
2	にぶい黄褐色10YR5/4	シ　ル　ト	
3	明　黄　褐　色10YR6/6	シ　ル　ト	

10号溝堆積土観察表

層	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色10YR5/4	シ　ル　ト	
2	褐　色10YR4/4	粘土質シルト	
3	にぶい黄褐色10YR5/4	シ　ル　ト	

11号溝堆積土観察表

層	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色10YR5/4	シ　ル　ト	

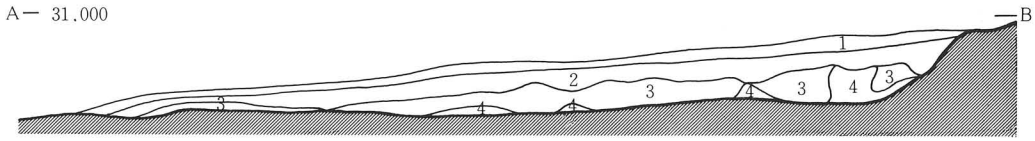
図10　溝跡断面

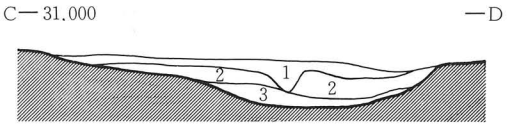
呈する。堆積土は３層観察される。

11号溝跡　10号溝跡東側に位置する。上幅40cm深さ10cmを計る。断面は舟底形を呈する。堆積土は１層である。

(4)溝状遺構

調査区中央部の緩斜面に位置する。平面は西側にやや屈曲した中脹れの形となっており、現存長は540cmを計り、最大幅は150cmである。 横断面は立ち上がりのゆるい皿状を呈し、 縦断面は北側のみに立ち上がりがみられる。底面はほぼ平坦で北側の立ち上がり部で深さ30cmを計る。堆積土は４層みられ、土師器器台・高坏・坏、須恵器坏・甕、灰釉陶器瓶、平瓦が出土している。





堆積土観察表

層	土　色	土　性	備　考
1	にぶい黄褐色10ＹＲ5/4	シ　ル　ト	炭化物･土師器を含む
2	にぶい黄橙色10ＹＲ6/3	シ　ル　ト	炭化物を含む
3	灰黄褐色10ＹＲ6/2	シ　ル　ト	酸化鉄を含む
4	にぶい黄橙色10ＹＲ7/3	粘土質シルト	酸化鉄を含む

図11　溝状遺構断面

(5)その他

掘立柱跡　２号掘立柱建物跡の南側で発見された。柱穴掘り方は隅丸方形を呈し、長軸は80cmを計る。柱痕跡の径は20cmで深さ48cmを計る。柱穴１基のみの確認であるため性格については不明であるが、規模・配置からみて掘立柱建物跡の可能性が考えられる。

ピット群　大小のピットが数多く確認されたが、組み合うものもみられず性格は不明である。土師器・須恵器が出土するものがある。

３．出土遺物について

今回の調査で出土した遺物には、古瓦・土師器・須恵器・施釉陶器・石製品・鉄製品がある。平箱にして10箱程の出土量である。瓦と土師器が最っとも多く全体の９割以上を占める。以下種類別に略述する。

瓦　　類

平瓦　出土した瓦は大半が小破片であるため全容は知り得ないが、叩き目圧痕や調整から下記に分類できる。

1類　凸面に格子叩き目がみられるもので、正格子叩き目と斜格子叩き目に分けられる。正格子叩き目は長細い圧痕を残す特徴がみられ、斜格子叩き目は格子の大きさから三つに細分される。凹面には糸切り痕がみられ、模骨痕の観察されるものもある。

2類　凸面に平行叩き目がみられるものである。瓦の長軸に対し斜行している。凹面には糸切り痕や模骨痕がみられ、一部ナデ調整が観察される。

3類　凸面全面にヘラケズリが施こされているものである。叩き圧痕に関しては不明である。凹面には模骨痕が観察される。

4類　凸面に縄叩き目がみられるものである。瓦の長軸に縦走している。ナデ調整による磨消したものもみられる。縄叩き圧痕の大きさから細分される。凹面には糸切り痕や布目痕が観察される。

5類　凸面に縄叩き目がみられ、ナデ調整により一部叩き目が磨り消されるものである。凹面には縦位方向のヘラケズリが観察される。

丸瓦　叩き目圧痕や形態の違いから下記に分類できる。

1類　凸面に格子叩き目がみられるものである。斜格子叩き目である。凹面には布目痕が観察される。

2類　凸面に平行叩き目がみられるものである。長軸に対し縦走・斜行・平行するものがあり細分される。全面にナデ調整が施こされるものもある。凹面には糸切り痕や布目痕が観察される。行基葺瓦の形態をもつものである。

3類　凸面全面にナデ調整がみられるものである。叩き圧痕に関しては不明である。凹面には糸切り痕や布目痕が観察される。行基葺瓦の形態をもつものである。

4類　凸面に縄叩き目がみられるものである。ナデ調整により一部磨り消しがみられる。凹面には布目痕が観察される。玉縁をもつ形態である。

土　器　類

土師器　全体的に摩耗が著しく不明な点が多いが、ロクロ未使用とロクロ使用のものに分けられる。器種として、前者には器台・高坏があり、後者には坏・高台付坏・甕がある。

器台　坏部下端から脚部の一部が残存する。坏部中央に孔が穿たれ脚部は裾広がりである。

高坏　裾広がり気味の脚部破片である。

坏　内面にミガキ調整がみられ、黒色処理が施こされている。底部に回転糸切り痕や回転ヘラケズリが観察されるものがある。大部分が摩滅のため特徴等不明のものが多い。

高台付坏　坏底部から台部のもので、高さ1cm程の台が付く。高台は外方へ張り出す特徴が

みられ、付高台である。

甕　破片資料のみである。口縁部が「く」の字状に外反するもの、体部にヘラケズリや叩き目が観察されるものがある。

土師質土器　破片資料であるが台付鉢と思われる。色調は黄橙色を呈する。外面は叩き目の後にナデ調整が施こされ、内面には回転ヘラナデがみられる。

須恵器　器種には坏・甕・壺がある。ほとんどが破片資料である。

坏　ロクロ調整後の切り離しは回転糸切りで無調整である。底径の大きさから二種類に分けられる。口縁部内弯気味のものが多い。

甕　器形を知り得る資料は皆無である。外面調整等に叩き目・ヘラケズリ・波状沈線が観察される。叩き目は全て平行叩き目である。波状沈線はくずれ気味である。又、平行沈線の下部に縦方向に施文された波状沈線もみられる。内面はナデ調整が主体であるが、平行文・同心円文・樹枝状のオサエがみられる。

壺　口縁部と底部の破片資料で詳細は不明である。

陶　器　類

灰釉陶器　器種には埦・皿・瓶がある。全て破片で全容のわかるものはない。又、灰釉陶器に類似するものが出土しているが断定には至らなかった。

埦　口縁部から体部にかけてのもので、口唇部が「く」の字状に外傾する。内面に茶系色の釉がみられる。胎土は緻密で灰白色を呈する。

皿　底部破片である。外面はロクロナデと回転ヘラケズリ調整が施こされている。器厚の違う部分がみられ有段皿とも考えうる。重ね焼きの跡が観察される。内面には灰色系の釉がみられる。胎土は良好で灰白色を呈する。

瓶？体部破片である。外面には黄緑系の釉が施こされ、ハケ塗りの痕跡が観察される。他の器種に比べて胎土はやや粗雑である。色調は灰白色を呈する。

石　製　類

石庖丁　刃部の一部分を残し欠損している。刃部は両面より砥がれており尖鋭である。最大厚は0.7cmを計る。石材は珪質岩である。

石錐？　周縁に剝離調整がみられ、基部は丸味をもち断面は菱形を呈する。長さ3.9cm、幅1.3cmを計る。石材は頁岩である。

石製品　径1.6cm程の円形を呈するもので磨製品である。最大厚を中央部にもち0.5cmを計る。周縁は両面より磨かれており中央部に稜がみられ、厚さ0.4cmを計る。碧玉製である。

鉄　製　類

刀子が確認されているが破損・銹化が著しく詳細は不明である。製品外では鉄鏃がある。

図12　出土遺物Ⅰ（平瓦１～３類）

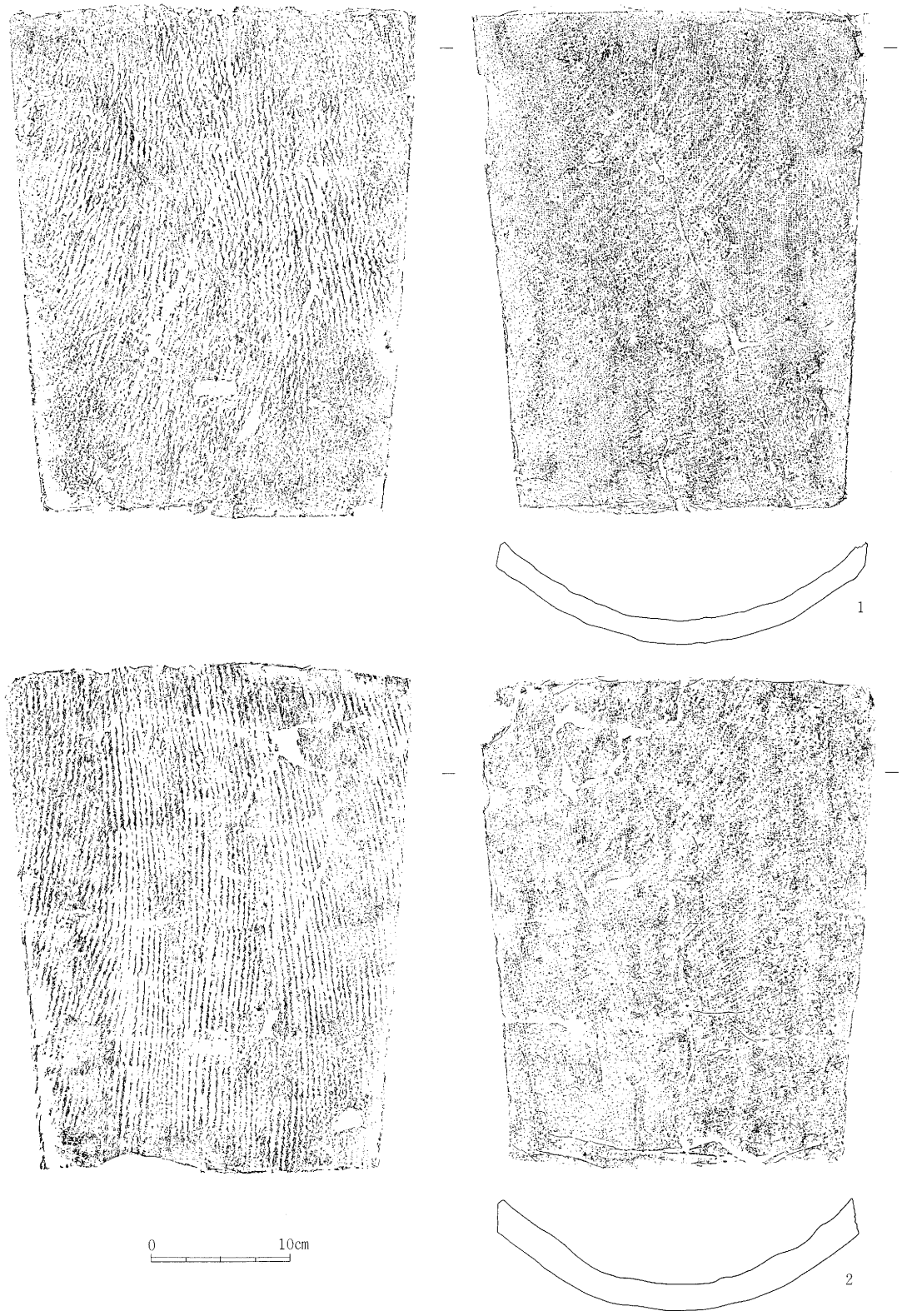


図13　出土遺物Ⅱ（平瓦４類）

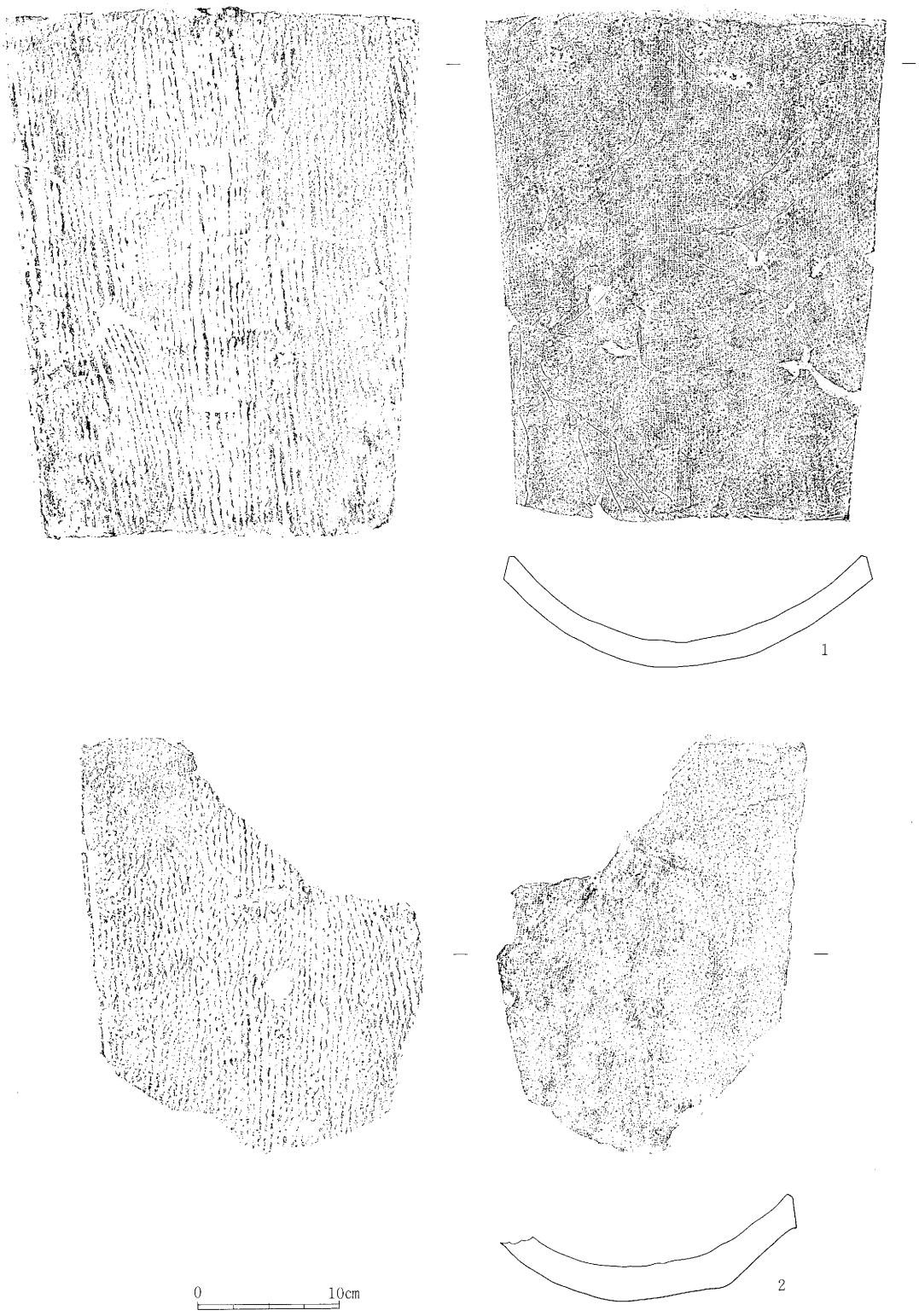


図14　出土遺物Ⅲ（平瓦４類）

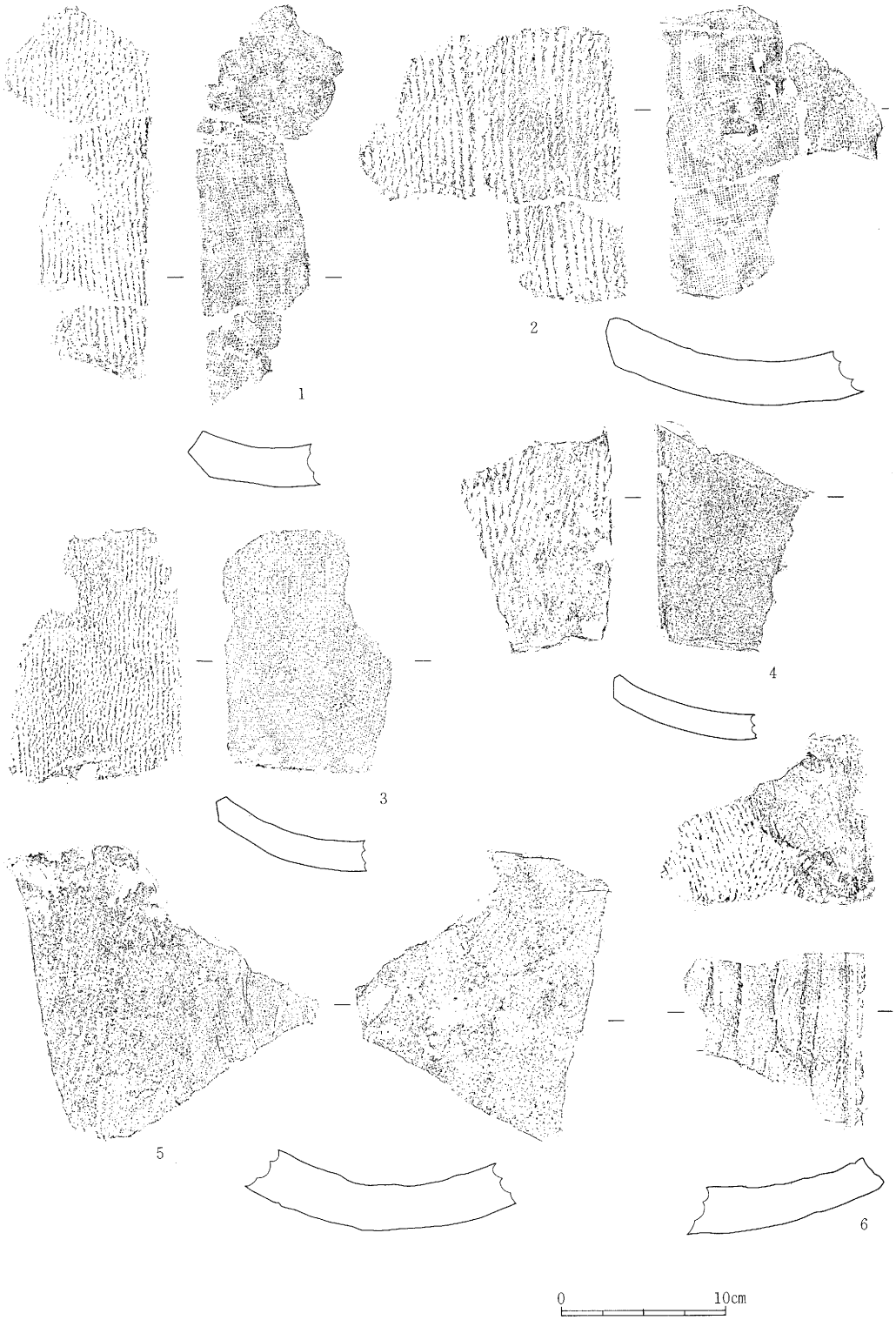


図15　出土遺物Ⅳ（平瓦４・５類）

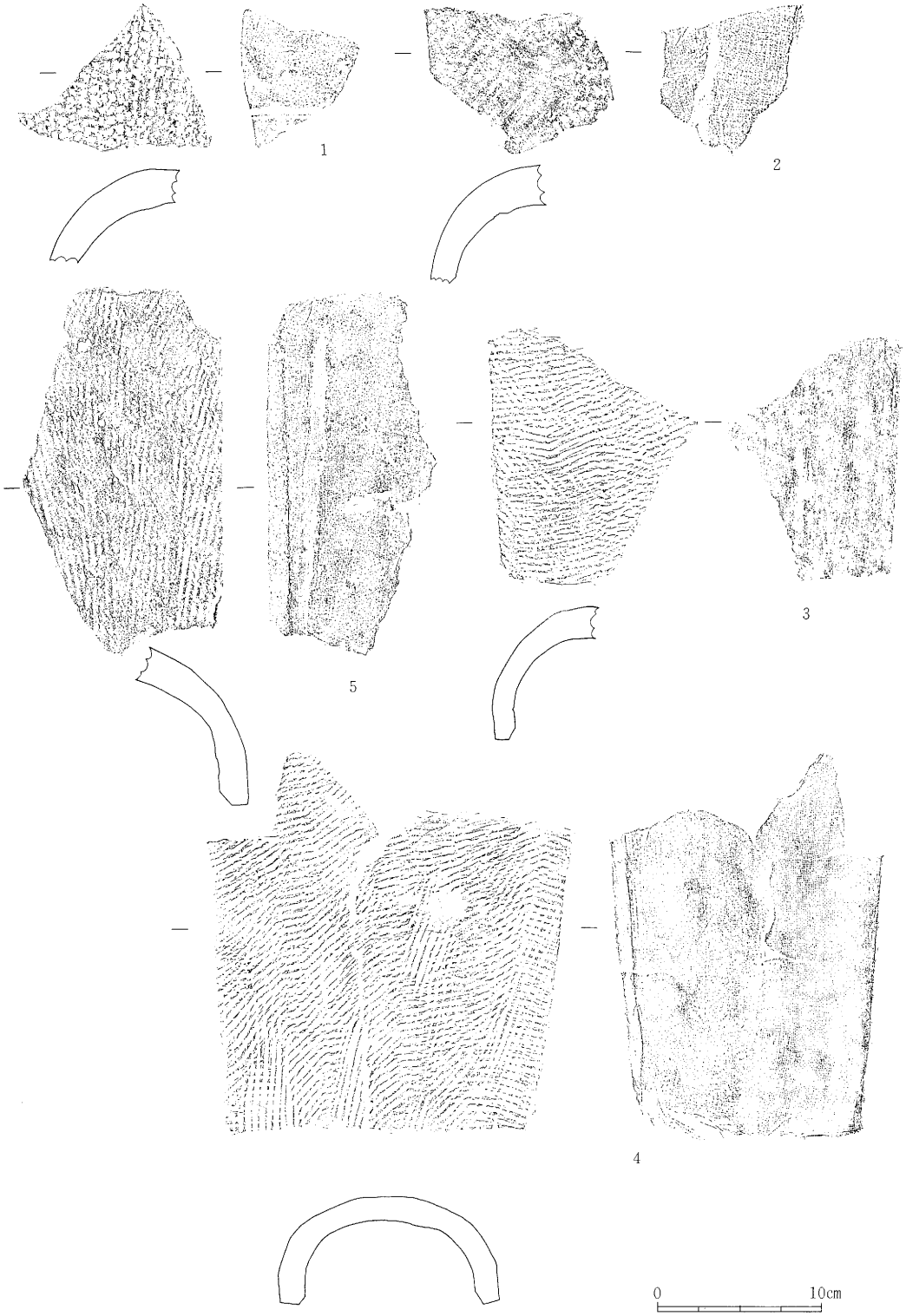


図16　出土遺物Ⅴ（丸瓦１・２類）

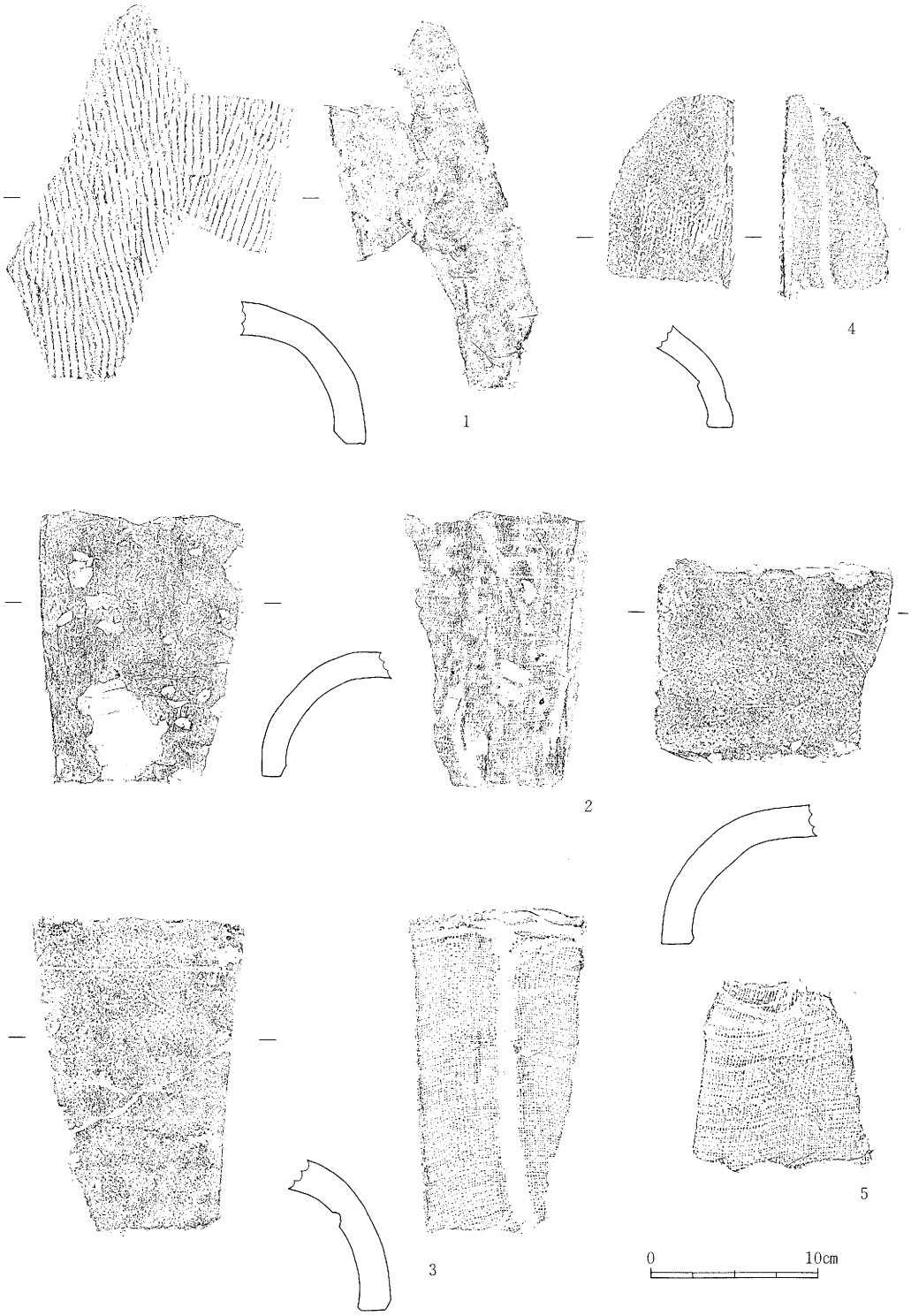


図17　出土遺物Ⅵ（丸瓦２～４類）

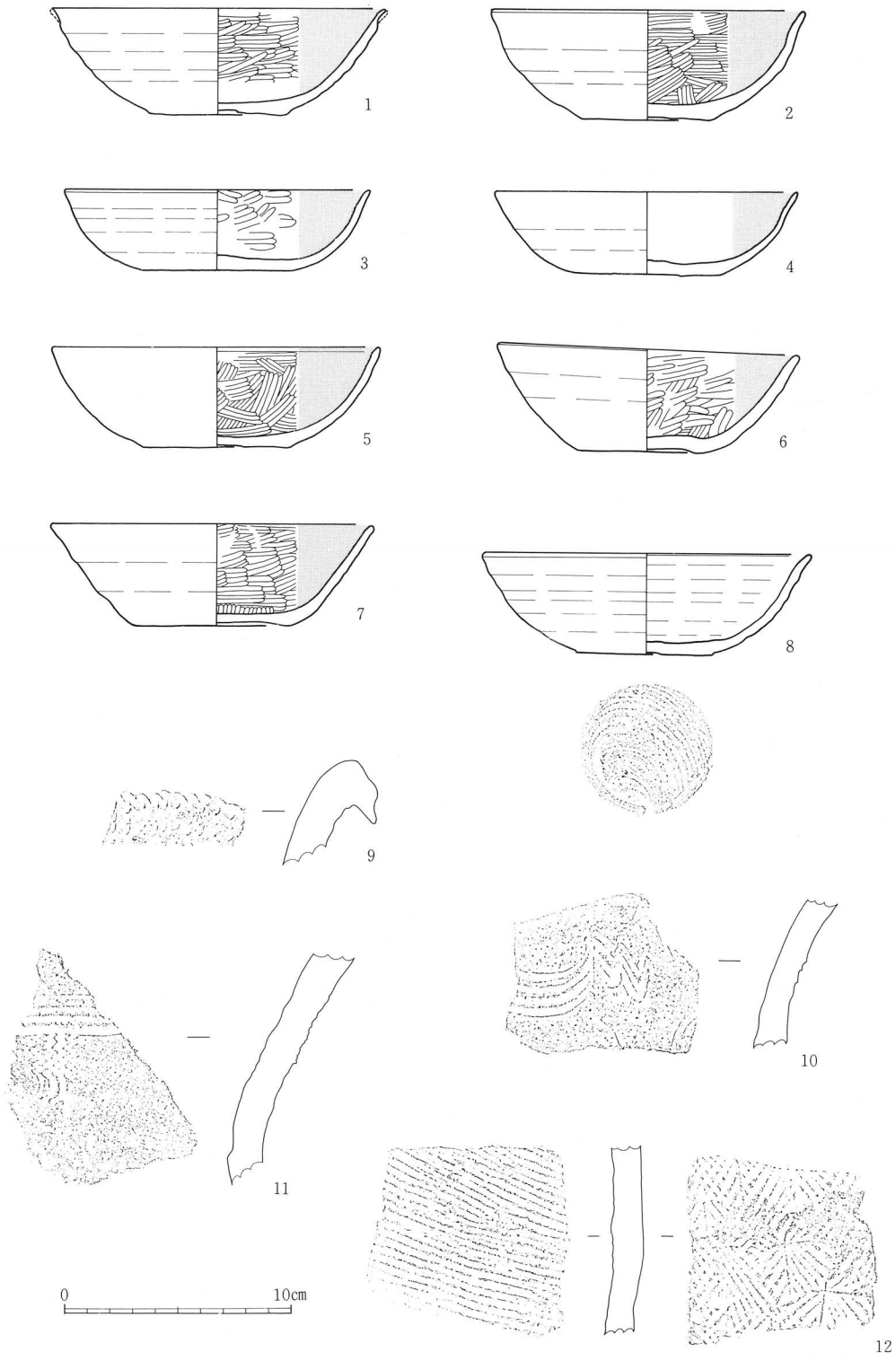


図18　出土遺物Ⅶ（土師器・須恵器）

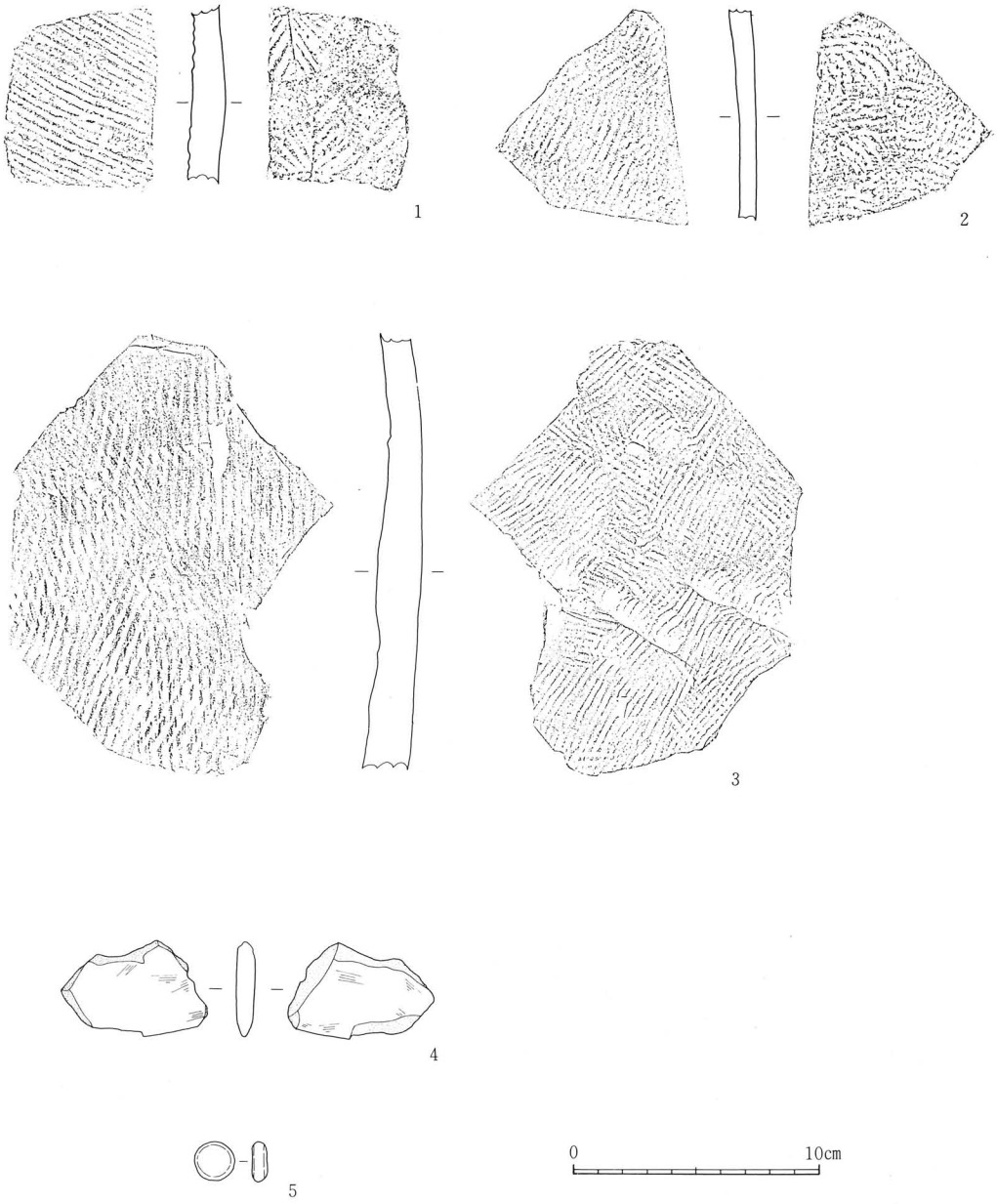


図19　出土遺物Ⅷ　(須恵器・石製品)

表1　出土遺物集成

			掘立柱 3号	土壙 1号	土壙 2号	土壙 3号	土壙 5号	溝 1号	溝 3号	溝状遺構	ピット	その他	計
瓦	平瓦	1類		4						1		2	7
		2類		2								1	3
		3類		1				1					2
		4類	4(3)	18	2			21		4		22	71
		5類										1	1
		不明						3					3
	丸瓦	1類		1				1					2
		2類		6				5				2	13
		3類		2									2
		4類		15	1	3		11					39
土師器	器台	脚部								3			3
	高坏	脚部								1			1
	坏	口縁部		333			1	2		15	1	5	357
		体部		683			18	28		7		24	760
		底部		369			3	11		12	1	22	418
	高台付坏	底部		7									7
	甕	口縁部	1	39				35	1	2	11	6	95
		体部		431				257	4	25	17	146	880
		底部		36				32	1	7	2	9	87
土師質土器	鉢	口縁部		7									7
		体部		8									8
		体部～底部		3									3
須恵器	坏	口縁部		76		1		25			4	5	111
		体部		54	1			28				4	87
		底部		43				24		2		4	73
	甕	口縁部		6	2			3			2	2	15
		体部		46	2			26	4	3		19	100
		底部							1		1		2
	壺	口縁部		3		2							5
		底部		1								1	2
灰釉陶器	埦	口縁部						1					1
	皿	底部						1				1	2
	瓶	体部								1			1
施釉陶器		体部						1				3	4
		底部						1					1
石製類	石庖丁			1									1
	石製品			1									1
	石錐											1	1
鉄製類	刀子			4								4	8
	鉄鏃			2									2

（　　）は完形品数

Ⅵ. 考　　察

1．出土遺物の年代

瓦　平瓦は類別の結果５類に分けられることを述べたが、大きく造瓦技法の点から二者に分けられる。前者は瓦凹面に模骨痕がみられる粘土板桶巻作りのもの、後者は一枚作りによるものである。１～３類の瓦が前者に相当し、後者が４類にあたる。同類の瓦出土例をみると、平瓦１類では多賀城創建平瓦第４類や伏見廃寺跡(註５)・三輪田遺跡(註６)にみられ、大蓮寺窯跡(註７)のテラス状遺構(註８)からは１～３類の瓦がみられる。平瓦４類は多賀城Ⅲ期瓦の特徴(註９)をもつものがあり、一般的にみられるものである。

丸瓦は４類に細分したが、造瓦技法から二者に分けられる。前者は粘土板巻作りのもので行基葺瓦、後者は粘土紐巻作りで玉縁付きの瓦である。２・３類の瓦が前者にあたり、４類の瓦が後者にあたる。丸瓦２類は多賀城創建丸瓦第４類や伏見廃寺跡にみられ、丸瓦３類は角田郡山遺跡(註10)にみられる。丸瓦４類は多賀城跡など一般にみられるものである。

以上の類例から瓦の年代についてみると、山田寺系単弁蓮花文軒丸瓦とロクロ挽き重弧文軒平瓦の組み合わせは多賀城創建以前の指摘(註11)がある。これらの組み合わせをもつ伏見廃寺跡やロクロ挽き重弧文軒平瓦を伴なっている三輪田遺跡は多賀城創建期以前・多賀城創建期の可能性を指摘している。このことから平瓦１～３類は多賀城創建期以前か多賀城創建期の可能性が考えられる。又、大蓮寺窯跡の調査によってロクロ挽き重弧文軒平瓦に伴なう平瓦が発見されているが、この平瓦と叩き目圧痕をはじめとし胎土・焼成の同じ平瓦がみとめられており、同窯(註12)の製品とみることができ、このことからも上記の可能性が考えられる。丸瓦２・３類も多賀城創建期以前か多賀城創建期の年代が考えられる。平瓦４類・丸瓦４類は多賀城Ⅲ期以後の範疇に入るものと考えられる。

土師器　ロクロ未使用の土師器は器台と高坏であるが、形態・特徴から古墳時代のものと考えられる。器台は坏部中央の孔や裾広がりの点から塩釜式に比定することができる。高坏については不明である。ロクロ使用の坏は表杉ノ入式にみることができ、甕も同型式に相当すると考えられる。(註13)

須恵器　坏は回転糸切り無調整のもので、口径に対する底径の比が小さい数値を示す。「多賀城周辺における杯形土器の変遷」では９－ｂ類に類別されるもので、10世紀代の年代があたえられている。甕・壺では古い様相をもつものもあるが詳しい点については不明である。(註14)

灰釉陶器　埦は口縁部の反りや色調から黒笹14号窯式に比定することができ、他のものも黒笹窯の製品と考えられる。11世紀前後の年代が考えられる。(註15)

2．遺構の性格と年代

掘立柱建物跡は調査区内の南側に位置しており、他の地点に較べれば平坦地にあたる。2号・3号掘立柱建物跡と掘立柱跡は柱穴の規模・位置関係から同ブロックのものと考えられ、建物方向がほぼ真北を示すものがあることなどから規画をもつ建物群の存在を考えうる。3号掘立柱建物跡の柱穴からは多賀城Ⅲ期瓦に比定される平瓦が礎板としてみられ、復元の結果三枚の完形瓦となっており、平瓦と建物との年代のひらきはないものと考えられる。他の建物跡と掘立柱跡も同様な時期が考えられる。1号掘立柱建物跡は上述した柱穴に較べると規模も小さく、2号掘立柱建物跡の柱穴を切っていることからも時期は下るものと考えられる。

土壙は1号土壙を除いて遺物も少なく際だった特徴もなく性格については不明である。1号土壙からは多賀城創建期以前・多賀城創建期と考えられる瓦や表杉ノ入式に比定される土師器坏や土師質の鉢など年代に差をもつ遺物が混在して出土している。これらから廃棄されたものと考えられ、捨て場としての性格が考えられる。廃棄された時期は出土した遺物の中で最っとも新しい特徴をもつ土師器坏か土師質土器の年代が妥当であり、平安期と考えられる。

溝跡では10・11号溝には出土遺物がなく時期に関しては不明であるが、土色・土性の比較から古代のものと考えられる。1号・2号・3号溝跡は調査区北側に位置し、全ての溝跡が調査区域外へ延びており性格等について不明な点が多い。1号溝跡は年代のきめてとなる遺物を出土していないが堆積土上層・下層よりロクロ土師器がみられることなどから平安期のものと考えられる。3号溝跡も同様な年代が考えられるが、1号溝跡を切っていることからいくらか下るものと考えられる。2号と3号溝跡は同様な形状をもち、溝軸線がほぼ真北に直交しており掘立柱建物跡との対応がみられ、区画としての性格が考えられる。

溝状遺構からは多種にわたる出土遺物がみられるが、土師器・須恵器以外は確認時の出土であり、年代としては平安期が考えられる。土師器・須恵器は全て破片である。性格については不明である。

3．遺跡の性格

今回の調査では掘立柱建物・土壙・溝・溝状遺構などが発見され、瓦・土師器・須恵器・石器などの遺物が出土した。平安期以外の遺構は検出されなかったが、燕沢遺跡は縄文時代から平安時代にかけての遺跡であることが言える。出土遺物では土師器・須恵器が他を圧倒しており、平安期を中心とするものと考えられる。特に瓦を伴なって規則性のみられる掘立柱建物跡の存在は国家的施設としての性格をうかがうことができ、従来言われてきた寺院か官衙の存在を裏付ける結果となっている。又、廃棄場所としての性格をもつ土壙から出土している瓦の中には多賀城創建期以前か創建期に比定されるものがあり、これらから上記年代の可能性をもつ

遺構の存在がうかがわれる。

しかし、今回の調査は面積にして720㎡程のもので、遺跡全体を把握するには至っておらず今後の資料増加を待つ必要がある。

Ⅶ. ま　と　め

今回の調査で得られた成果は次のようになる。

1．燕沢遺跡は台ノ原・小田原丘陵東端部の台地に位置する縄文時代から平安時代にかけての遺跡である。

2．調査区内より掘立柱建物跡３棟・土壙４基・溝跡５条・溝状遺構１基・掘立柱跡１基・ピット多数を発見し、瓦・土師器・須恵器・施釉陶器・石製品・鉄製品が出土した。

3．発見された掘立柱建物跡や瓦から寺院跡か官衙遺跡としての性格が考えられ、遺構の年代は出土遺物より平安期と考えられる。

4．出土した瓦の中には、多賀城創建期以前又は創建期に比定されるものがある。左記の年代をもつ遺構の存在の可能性がうかがわれる。

5．詳細な性格については今後の調査・研究に待つところが大きい。

註

(註１)　石田茂作「仏教の初期文化」岩波講座『日本歴史』昭和９年

(註２)　伊東信雄「燕澤古瓦出土地」仙台市史３　「燕沢古瓦出土遺跡」『仙台の文化財』宝文堂

(註３)　内藤政恒「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦(Ⅲ)」『歴史考古』第12号　昭和39年

(註４)　原田良雄編『東北古瓦図録』には歯車文軒丸瓦・宝相花文軒丸瓦・細弁蓮花文軒丸瓦・重弁蓮花文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦が掲載されており、その後の踏査においても上記の軒瓦が採集されている。

(註５)　進藤秋輝・高野芳宏・渡辺伸行「多賀城創建瓦の製作技法」『研究紀要Ⅱ』宮城県多賀城跡研究所　昭和50年

(註６)　佐々木茂楨「宮城県古川市伏見廃寺跡出土の古瓦」『歴史考古』第19・20合併号　昭和46年
註11に同じ

(註７)　丹羽茂『三輪田遺跡』古川市文化財 調査報告書第４集　昭和55年

(註８)　古窯跡研究会「仙台市大蓮寺窯跡発掘調査報告」『陸奥国官窯跡群Ⅱ』昭和51年

(註９)　進藤秋輝・高野芳宏両氏御教示による。

(註10)　新庄屋元晴『角田郡山遺跡』角田市文化財調査報告書第３集　昭和55年

(註11)　進藤秋輝「多賀城系古瓦の二系統」『研究紀要Ⅴ』宮城県多賀城跡研究所　昭和53年

(註12)　渡辺泰伸氏の協力を得て実際に瓦どうしの比較検討を行なった結果である。

(註13)　氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　昭和32年

(註14)　岡田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所　昭和49年

(註15)　白鳥良一氏の御教示による。

写　真　図　版

図版１　遺構周辺航空写真（南より、昭和32年）

図版２　遺跡周辺航空写真（南より、昭和55年）

3　遺構配置（北西部）

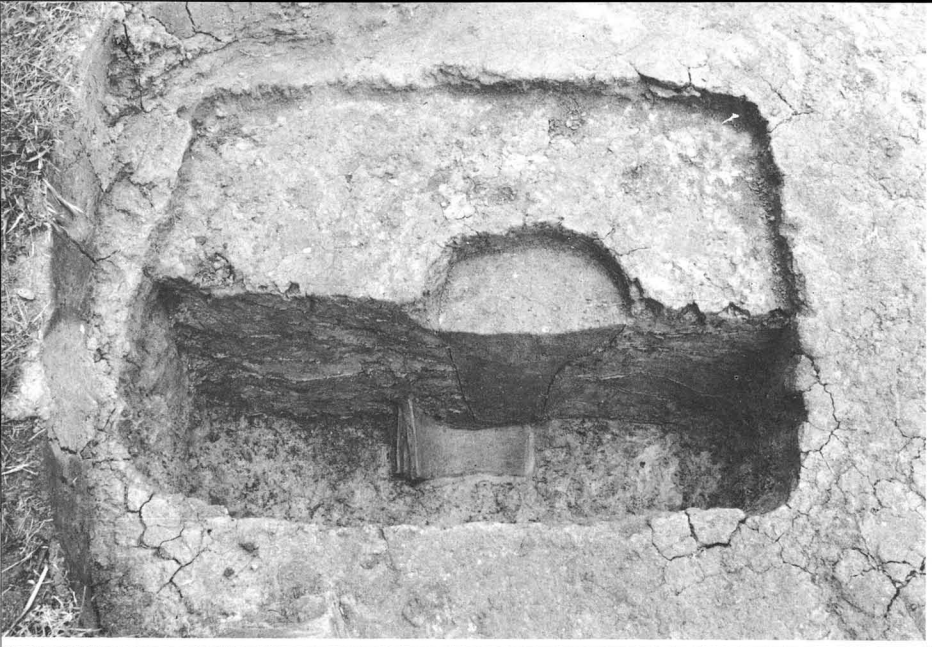
4　遺構配置（中央部）

5　遺構配置（南西部）

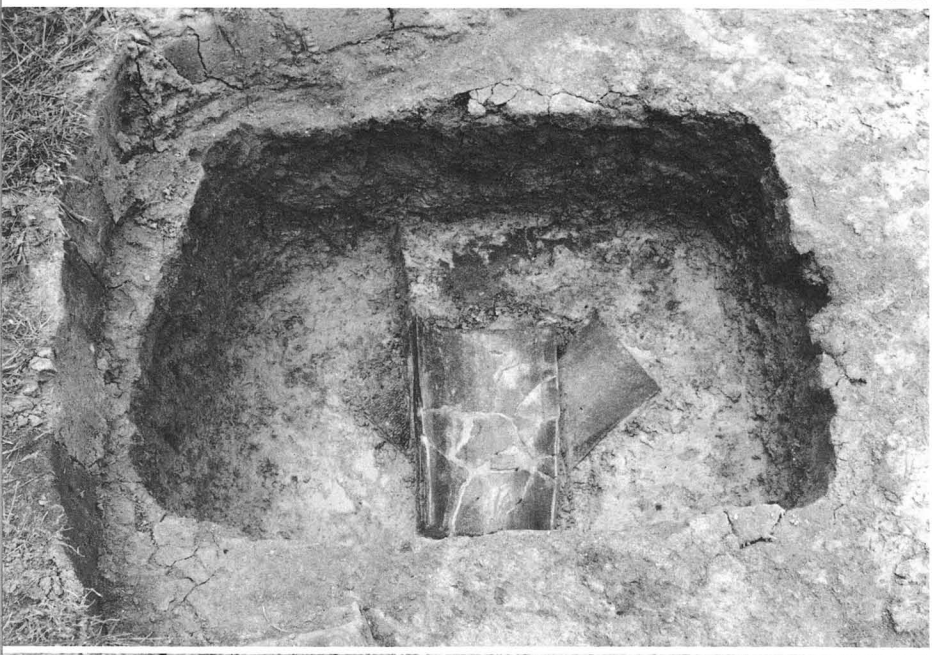
6　1号掘立柱建物跡
（南西より）

7　2号掘立柱建物跡
（南より）

8　3号掘立柱建物跡
（東より）



9　３号掘立・柱穴断面
（南より）



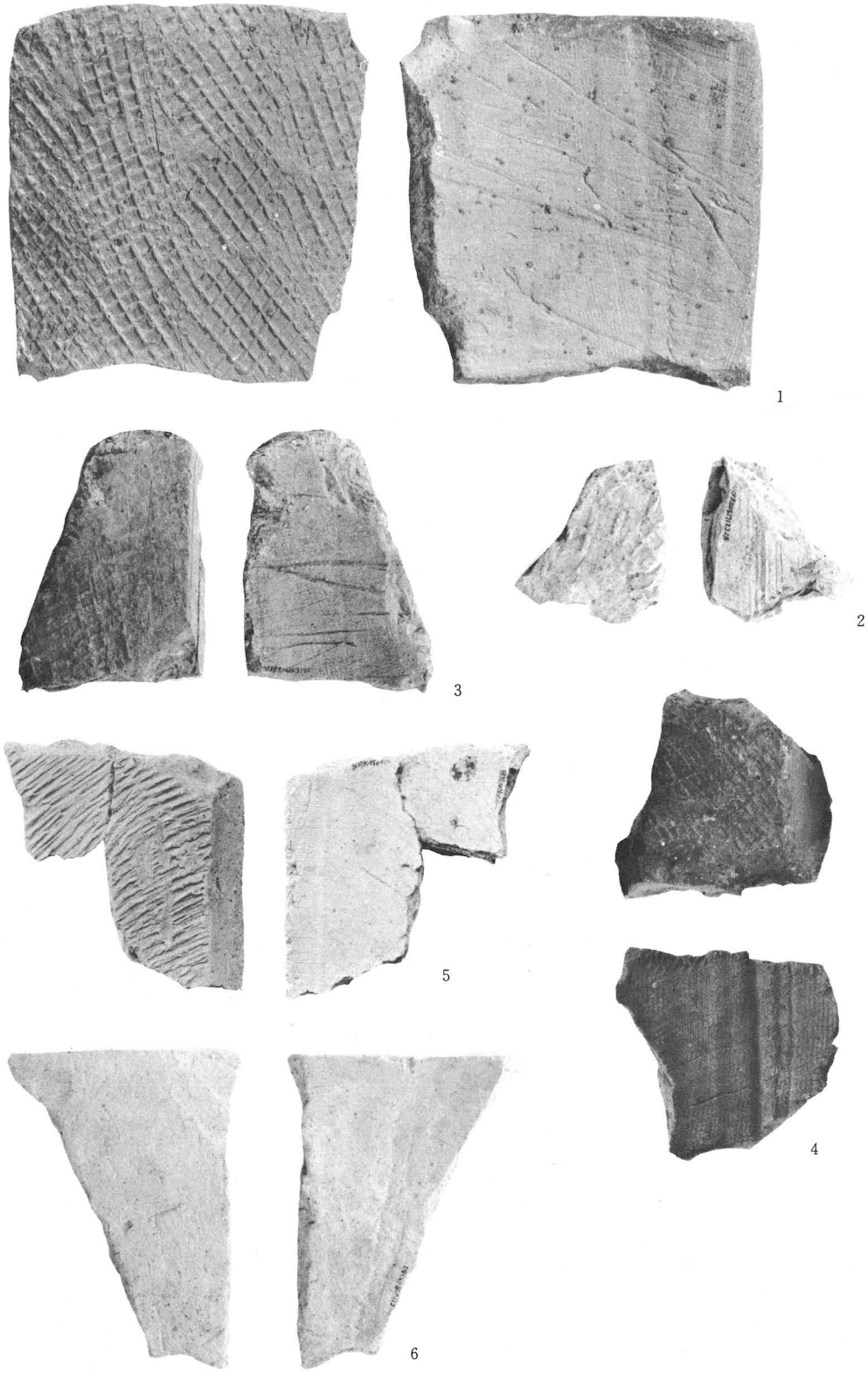
10　３号掘立・柱穴内
瓦検出状況

11　１号土壙・遺物検出
状況（東より）

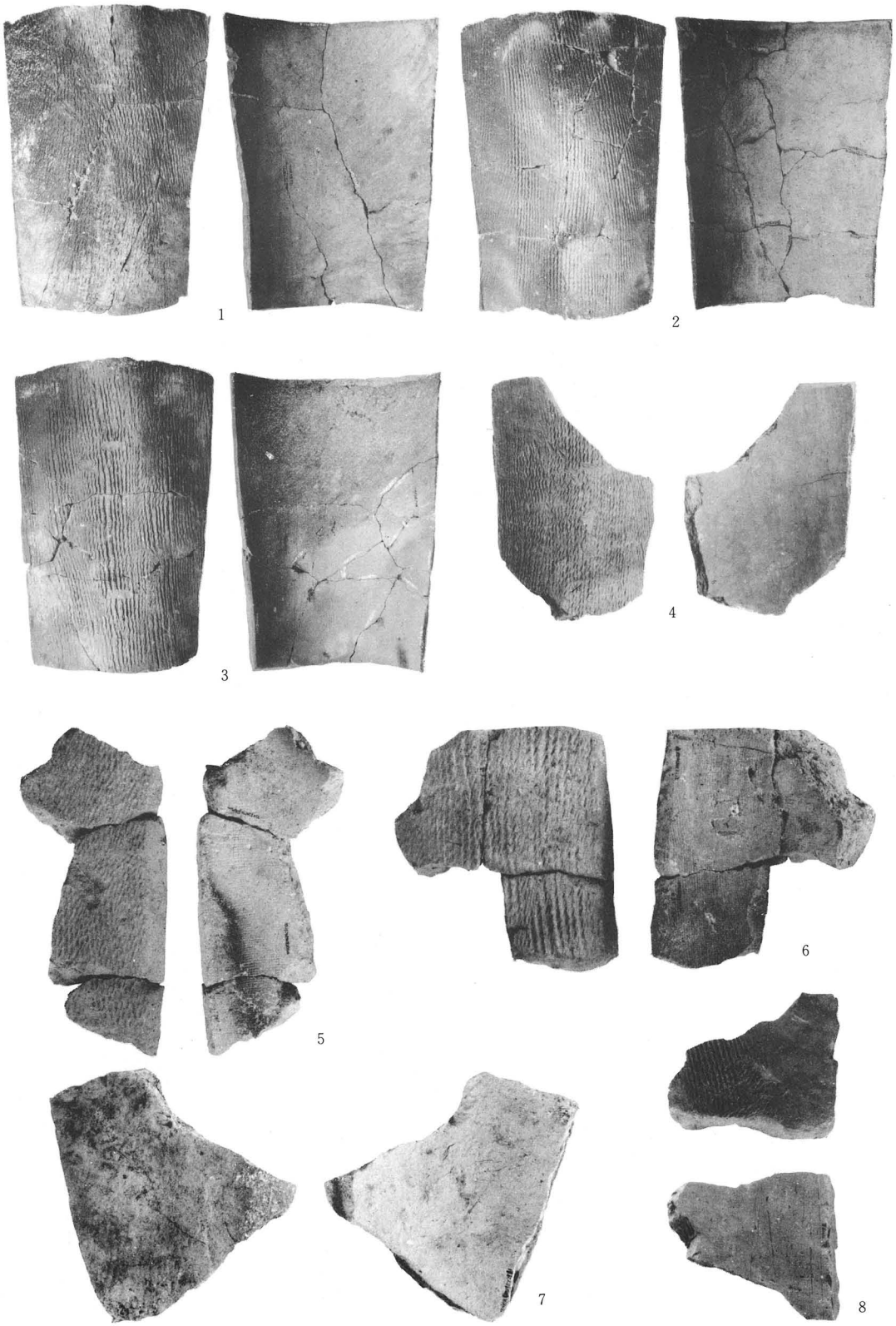
12　1号土壙・遺物検出状況（北西部）

13　1号溝（西より）

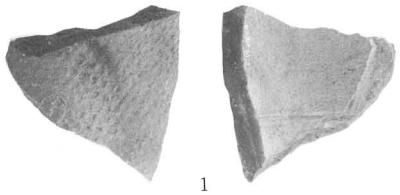
図版14



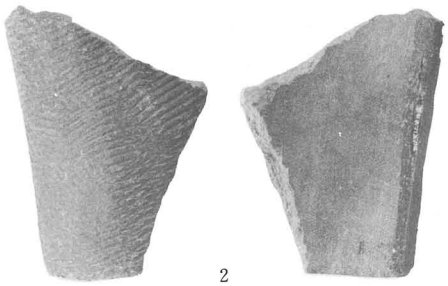
図版15



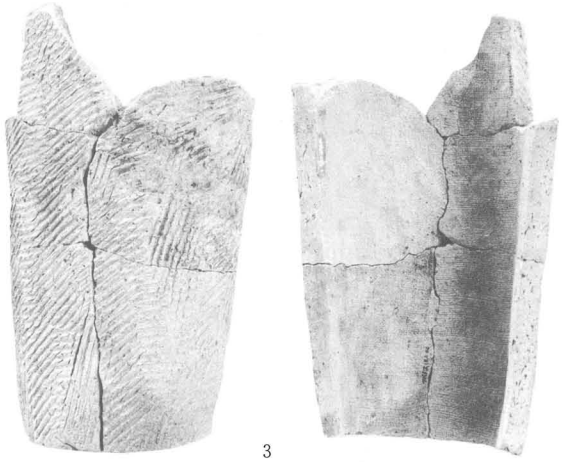
図版16



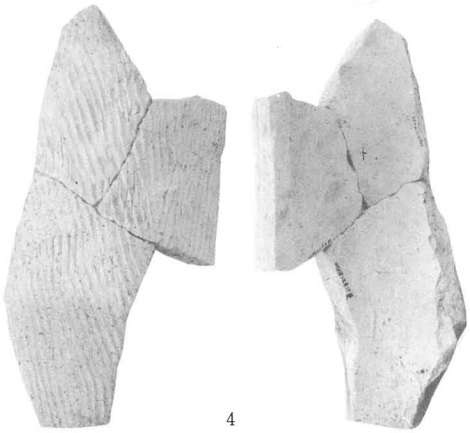
1



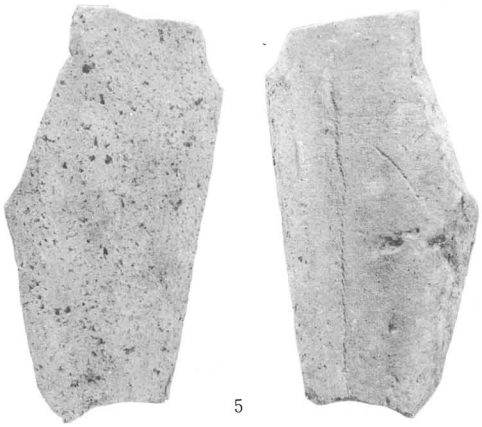
2



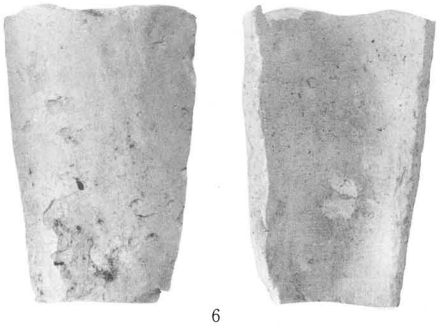
3



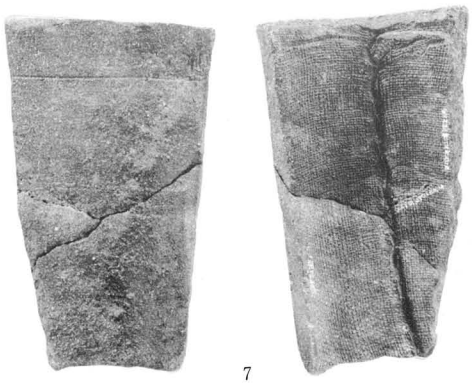
4



5

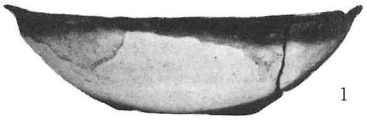


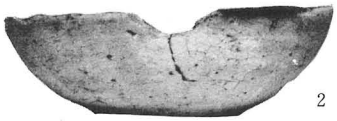
6

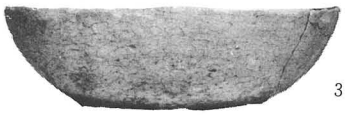


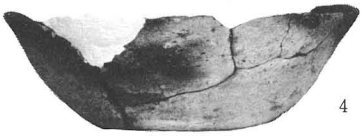
7

図版17

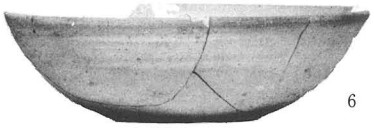

1


2


3


4

5


6

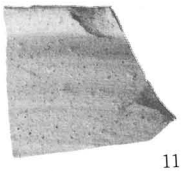
7

8

9

10

14


11

12

13

15

16

表２　掲載出土遺物観察表

図版番号	種類	特徴	遺構地区	備考
12－1	平瓦 1類	凸面　格子目叩き（斜格子）　幅６cm程の単位 凹面　模骨痕・布目（１cm内12×12）・布縫い合わせ目・斜行する条痕（布目上）　縦位のナデ 色調　灰色　硬質　最大厚2.5cm	１号土壙 埋土	写真図版14－１ (整理番号)平瓦1
－2	〃	凸面　格子目叩き（斜格子） 凹面　布目（12×12）　縦位のケズリ 色調　浅黄橙色　硬質　最大厚2.6cm	１号土壙 ２層	写真図版14－２ 平瓦　51
－3	〃	凸面　格子目叩き（斜格子）　浅いケズリ 凹面　糸切痕・布目（10×10）・斜行する条痕（布目下）・縦位のナデ 色調　灰白色　硬質　最大厚1.9cm	C－３区 Ⅰ層	写真図版14－３ 平瓦　28
－4	〃	凸面　格子目叩き（正格子）　浅いケズリ 凹面　糸切り痕・模骨痕・布目（10×10）　一部格子目叩き 色調　灰色　硬質　最大厚2.5cm	試掘	写真図版14－４ 平瓦　39
－5	平瓦 2類	凸面　平行叩き目 凹面　糸切り痕・模骨痕・布目（９×９）・ナデ 色調　浅黄橙色　硬質　最大厚2.4cm	試掘	写真図版14－５ 平瓦　13
－6	平瓦 3類	凸面　ケズリ（縦・横位方向） 凹面　模骨痕・布目（10×10）　布縫い合わせ目　端部ナデ 色調　黄橙色　やや軟質　最大厚2.7cm	１号溝 埋土	写真図版14－６ 平瓦　34
13－1	平瓦 4類	凸面　縄叩き目（縦位）・中央部に3.5×1cmの凹形２ケ所　一部自然釉 凹面　糸切り痕・布目（８×８）　周縁部ナデ　色調　灰色　硬質 (完形品)長軸37cm、広端部26.5cm、狭端部21cm、厚さ1.6cm	１号掘立柱建物 底面	写真図版15－１ 平瓦　92
－2	〃	凸面　縄叩き目(縦位)中央部に3.5×1cmの凹形２ケ所　一部自然釉 凹面　糸切り痕　布目（８×８）　周縁部ナデ　色調　灰色　硬質 (完形品)長軸37cm、広端部26.5cm、狭端部22cm、厚さ2.0cm	１号掘立柱建物 底面	写真図版15－２ 平瓦　93
14－1	〃	凸面　縄叩き目(縦位)中央部に3.5×1cmの凹形２ケ所　一部自然釉 凹面　糸切り痕、布目（８×８）　周縁部ナデ　色調　灰色　硬質 (完形品)長軸38cm、広端部25cm、狭端部21cm、厚さ1.6cm	１号掘立柱建物 底面	写真図版15－３ 平瓦　94
－2	〃	凸面　縄叩き目（縦位）　中央部に３×１cmの凹形１ケ所 凹面　糸切り痕・布目（７×７）　周縁部ナデ 色調　灰色　硬質　最大厚2.1cm	１号溝 ２層	写真図版15－４ 平瓦　15
15－1	〃	凸面　縄叩き目（縦位） 凹面　布目（６×６）　ナデ 色調　灰白色　硬質　最大厚2.2cm	C－３区 Ⅰ層	写真図版15－５ 平瓦　14
－2	〃	凸面　縄叩き目（縦位） 凹面　糸切り痕　布目（７×７）　一部ナデ 色調　灰白色　硬質　最大厚2.5cm	C－３区 Ⅰ層	写真図版15－６ 平瓦　19
－3	〃	凸面　縄叩き目（縦位） 凹面　布目（10×10）　一部ナデ 色調　灰色　硬質　最大厚1.8cm	１号溝 埋層	平瓦　6
－4	〃	凸面　縄叩き目　一部自然釉 凹面　布目（７×７）　自然釉 色調　灰色　硬質　最大厚1.5cm	１号土壙 ３層	平瓦　7
－5	〃	凸面　縄叩きの後ナデすり消し　一部自然釉 凹面　糸切り痕　布目（７×７）　ナデ 色調　灰白色　硬質　最大厚3.0cm	１号溝 埋土	写真図版15－７ 平瓦　18

図版番号	種類	特徴	遺構地区	備考
15－6	平瓦 5類	凸面　縄叩き（縦位・斜行）の後一部ナデすり消し 凹面　布目（8×8）の後、縦位のケズリ 色調　灰色　硬質　最大厚2.5cm	表採	写真図版15－8 (整理番号)平瓦31
16－1	丸瓦 1類	凸面　格子叩き目（斜格子） 凹面　糸切り痕？　布目痕　ナデ　横位の条痕 色調　褐色に灰白色　硬質　断面色調青灰色に褐色が挟む　最大厚2.3cm	1号土壙 5層	写真図版16－1 丸瓦　22
－2	〃	凸面　格子叩き目 凹面　布目（8×8）　布縫い合わせ目 色調　灰白色　硬質　最大厚2.4cm	1号溝 埋土	丸瓦　42
－3	丸瓦 2類	凸面　平行叩き目（横位・斜行） 凹面　糸切り痕　布目（10×10）　縦位のナデ 色調　灰色　硬質　最大厚1.6cm	1号土壙 底面	写真図版16－2 丸瓦　16
－4	〃	凸面　平行叩き目（縦位・横位・斜行）　幅4cm程の単位 凹面　糸切り痕　布目（11×11） 色調　浅黄橙色　やや軟質　狭端部11cm　最大厚1.6cm	1号土壙 4層	写真図版16－3 丸瓦　1
－5	〃	凸面　平行叩き目（縦位）　全面ナデ 凹面　糸切り痕　布目（10×10）　布縫い合わせめ　縦位のナデ 色調　灰白色　硬質　最大厚1.9cm	1号土壙 5層	写真図版16－5 丸瓦　2
17－1	〃	凸面　平行叩き目（縦位） 凹面　糸切り痕　布目（11×11）　ナデ 色調　浅黄橙色　やや軟質　最大厚1.8cm	1号土壙 5層	写真図版16－4 丸瓦　17
－2	丸瓦 3類	凸面　全面縦位方向のナデ 凹面　糸切り痕　布目（11×11）　ナデ 色調　灰白色　硬質　最大厚1.6cm	1号土壙 5層	写真図版16－6 丸瓦　14
－3	丸瓦 4類	凸面　縄叩きの後全面ナデすり消し　広端部付近に条痕　一部自然釉 凹面　粘土紐痕　布目（7×7）　布縫い合わせめ 色調　灰色　硬質　最大厚1.6cm	1号土壙 2層	写真図版16－7 丸瓦　5
－4	〃	凸面　縄叩き（縦位）の後全面ナデすり消し 凹面　布目（9×9） 色調　灰色　硬質　最大厚1.5cm	1号土壙 埋土	丸瓦　4
－5	〃	凸面　縄叩きの後　横位方向のナデすり消し 凹面　布目（7×7）　玉縁との接合部に条痕 玉縁一部確認　色調　灰色　硬質　最大厚1.8cm	1号土壙 4層	丸瓦　15
18－1	土師器 坏	外面　口縁部外傾気味　体部－ロクロナデ　底部－回転糸切り無調整（右回り） 内面　黒色処理　口縁～体部－横位方向のヘラミガキ 色調　黄橙色　推定口径14.9cm　底径6.1cm	1号土壙 3層	写真図版17－1 土師器坏5
－2	〃	外面　口縁部外傾気味　体部　ロクロナデ　切り離し不明 内面　黒色処理　口縁～体部－横位方向のヘラミガキ　底部－放射状のヘラミガキ 色調　黄橙色　推定口径13.9cm　底径5.9cm	1号土壙 3層	写真図版17－2 土師器坏7
－3	〃	外面　体部　ロクロナデ　切り離し不明 内面　黒色処理　口縁～体部－横位方向のヘラミガキ 色調　黄橙色　推定口径13.5cm　底径6.5cm	1号土壙 5層	土師器坏2
－4	〃	外面　体部　ロクロナデ　切り離し不明 内面　黒色処理 色調　黄橙色　口径13.4cm　底径6.3cm	1号土壙 5層	土師器坏3

図番号	種類	特徴	遺構地区	備考
18－5	土師器坏	外面　体部－ロクロナデ　底部－回転ヘラケズリ 内面　黒色処理　口縁～体部－横位方向のヘラミガキ 色調　黄橙色　推定口径14.5cm　底径6.4cm	1号土壙 3　層	写真図版17－3 土師器坏4
－6	〃	外面　体部－ロクロナデ　切り離し不明 内面　黒色処理　口縁～体部－横位方向のヘラミガキ 色調　黄橙色　口径13.4cm　底径5.1cm	1号土壙 埋　土	土師器坏6
－7	〃	外面　体部－ロクロナデ　切り離し不明 内面　黒色処理　口縁～底部－横位方向のヘラミガキ 色調　黄橙色　口径14.3cm　底径6.9cm	1号土壙 3　層	写真図版17－4 土師器坏1
－8	須恵器坏	外面　ロクロナデ　底部－回転糸切り無調整（右回り） 内面　ロクロナデ 色調　灰色　口径14.6cm　底径6.0cm	1号土壙 5　層	写真図版17－6 須恵器34
－9	須恵器甕	口縁部　おりかえしとなり口唇部は三角形を呈する 外面　粗雑な3条の波状沈線　内面はロクロナデ　色調　灰色 最大厚1.5cm	1号土壙 埋　土	写真図版17－7 須恵器26
－10	〃	頸部　外面　平行叩き目　ロクロナデの後に4条の波状沈線 内面　ロクロナデ　色調　灰色　最大厚1.5cm	C－3区 Ⅰ　層	写真図版17－8 須恵器1
－11	〃	頸部　外面　ロクロナデ　4条の波状沈線と縦位方向の3条の波状沈線 内面　ロクロナデ　色調　灰色　最大厚1.4cm	C－3区 Ⅰ　層	写真図版17－9 須恵器4
－12	〃	体部　外面　平行叩き目　内面　樹枝状のオサエ 色調　灰色　石英粒を含む　最大厚1.1cm	B－4区 Ⅰ　層	写真図版17－10 須恵器29
19－1	〃	体部　外面　平行叩き目　内面　樹枝状のオサエ 色調　灰色　図18－12と同個体と考えられる	C－3区 Ⅰ　層	須恵器30
－2	〃	体部　外面　平行叩き目　格子状のオサエと同心円文のオサエ 色調　外面　黒褐色　内面　赤褐色　最大厚0.9cm	1号土壙 埋　土	須恵器27
－3	〃	体部　外面　平行叩き状であるがつなぎが認められ格子を呈する 内面　平行叩き目　色調　灰色　最大厚1.7cm	1号土壙 2　層	須恵器33
－4	石庖丁	刃部　両面より砥がれている　最大厚0.7cm 珪質岩製	1号土壙 埋　土	写真図版17－14
－5	石製品	径1.6cm程の円形で磨製品　いくらか中脹み　最大厚0.5 cm 周縁は両面より磨かれ中央部に稜　幅0.4cm　碧玉製	1号土壙 底　面	写真図版17－15

写真図版番号	種類	特徴	遺構地区	備考
17－5	土師器坏	口縁部のみ　外面　ロクロナデ　「宗」の墨書 内面　黒色処理　横位方向のヘラミガキ	1号土壙 埋　土	
－11	灰釉陶器埦	口縁部のみ　口唇部「く」の字に外傾　外面色調　灰白色 内面に茶系色の釉	1号溝 埋　土	
－12	灰釉陶器皿	底部のみ　外面　ロクロナデ・ヘラケズリ　色調　灰白色 内面に灰色系の釉	1号溝 埋　土	
－13	灰釉陶器瓶？	体部のみ　外面　ロクロナデ　黄緑系の釉　ハケ塗り 内面　ロクロナデ	溝状遺構 埋　土	
－16	石錐？	周縁　剥離調整　基部は丸味をおびる　断面は菱形を呈する 長さ3.9cm　幅1.3cm　頁岩製	Ⅰ　層	

職　員　録

社会教育課

課　　長　永野昌一
主　　幹　早坂春一

文化財管理係

係　　長　鈴木昭三郎
主　　査　鈴木高文
　　（10月1日異動）
主　　事　山口　宏
〃　　渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)　早坂春一
教　　諭　佐藤　隆
〃　　渡辺忠彦
〃　　佐藤　裕
〃　　加藤正範
主　　事　田中則和
〃　　結城慎一
〃　　成瀬　茂
教　　諭　青沼一民
主　　事　柳沢みどり
〃　　木村浩二
〃　　篠原信彦
〃　　佐藤　洋
〃　　金森安孝
〃　　佐藤甲二
〃　　吉岡恭平
〃　　工藤哲司
〃　　渡部弘美
〃　　主浜光朗
〃　　斎野裕彦
〃　　長島栄一
〃　　荒井　格
臨時職員　高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
第22集　経ケ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）

仙台市文化財調査報告書第39集

燕沢遺跡発掘調査報告書

昭和57年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL 63－1166